

3	学校名 住田町立世田米小学校 外 4 校	R4～R6
---	----------------------	-------

令和 6 年度研究開発実施報告書

1 研究開発の概要

(1) 研究のねらい

岩手県の中山間地域に位置し、豊かな自然に恵まれた住田町では、教育振興基本計画基本目標「生涯学び続け、新しい社会を創造する心豊かな人づくり」の基に、自立して生き抜く力や協働する力、豊かな人生や地域づくりを主体的に創造する力を身につけた人材育成を目指し、これまでもその風土を生かした教育を推進してきた地域である。しかしながら、時代の潮流の中、中山間地域における地域課題に直面している現実もまた事実である。本町が、将来にわたって持続可能な町の姿を描く上でも、ふさわしい資質・能力を獲得しながら自己の人生や社会を創造できる人材育成を目指すことは、今後ますます不可欠であり、時代が今後どのように変化を遂げてても不易な考え方である。したがって、本町で学ぶ子どもたちに、町内の小・中学校及び県立高校が一体となって具体的に育むべき資質・能力を明らかにしながら、着実に育成することができるよう、全町を挙げた教育の展開を試みる研究開発に取り組む。

(2) 研究の方針【図 1－1：住田町研究開発グランドデザイン】

前述の研究のねらいを踏まえ、本研究開発においては、小・中学校及び高等学校が育成を目指す資質・能力を共有し、一体的に推進する教育を展開する。具体的には、12 年間を通して、「子どもたちが変化の激しい社会において、充実した人生を実現していくために、豊かな心を持ち、自ら主体的に未来の社会を創造していくことのできる力（社会的実践力）の育成」を目指す。そのために、住田町内の教育の特色を生かした教科「地域創造学」を新設し、これを中核に位置付けた 12 年間の教育課程の編成と、その指導方法及び評価方法等の開発を行っていく。

(3) 研究仮説

新設教科「地域創造学」において、小学校から高等学校まで、新しい時代を切り拓き、社会を創造していくための社会的実践力の育成を共通に目指し、以下の手立てを講ずることにより、新しい時代を切り拓く心豊かな人材を育成することができるであろう。

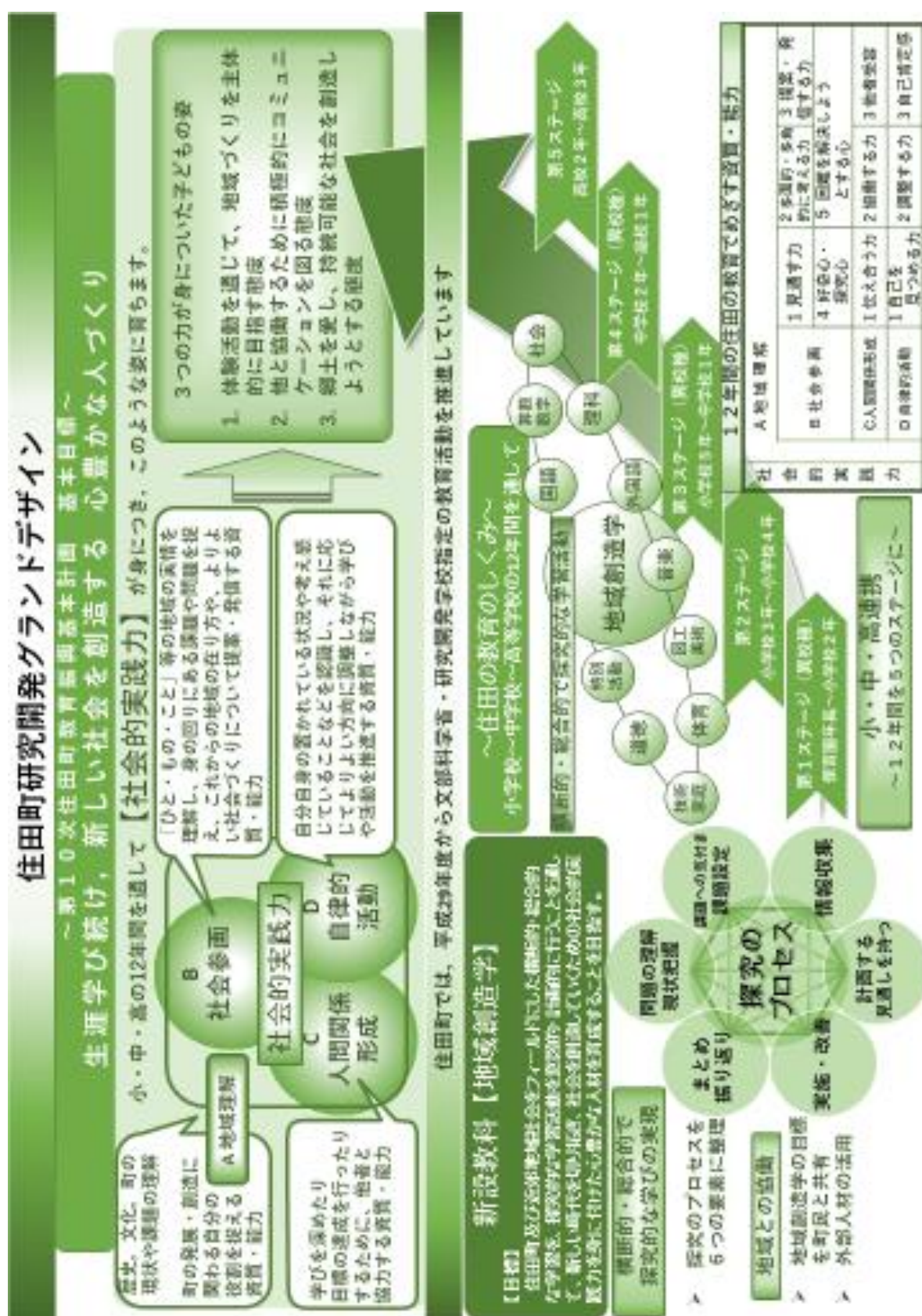
そのために具体的な手立てとして、以下の 5 点に取り組む。

- ① 新しい時代を切り拓くために必要とされる資質・能力（社会的実践力）の規定
- ② 社会的実践力を育成するための教育課程の編成や効果的な指導方法の開発
- ③ 社会的実践力の育成を評価するための具体的指標の開発
- ④ 教育課程の特例による教科「地域創造学」の創設と授業実践
- ⑤ 新設「地域創造学」に関するアンケート調査や外部評価の効果的な活用と教育課程等の在り方の検証

さらに研究開発学校延長指定 3 年間に限っては、上記に加えて、以下の 3 点について重点的に取組を進め、提言を行う。

- ① これまでに開発してきたカリキュラム全体の不断の見直しサイクルの構築
- ② 「探究の六つのプロセス」と社会的実践力とのつながりを意識した学習評価の工夫
- ③ 社会的実践力を育成するための「地域創造学」教科書の開発・実施・改善

【図 1-1】 住田町研究開発グランドデザイン



(4) 教育課程の特例

- ① 小学校では、生活科、特別の教科道徳、外国語活動、外国語及び総合的な学習の時間を減じて、全学年において「地域創造学」を1学年 106 時間、2学年 110 時間、3、4、5、6 学年では 85 時間設定した。
- ② 中学校では、1、2 学年においては国語を減じて、また、全学年において、特別の教科道徳、社会及び総合的な学習の時間を減じて「地域創造学」を1年生では 59 時間、2、3 学年では 79 時間設定した。
- ③ 高等学校では、全学年において総合的な探究の時間を減じて、「地域創造学」を1単位 35 時間設定した。

2 研究開発の経緯

(1) 研究の経過

	実施内容等
第一年次	(1) 新設教科「地域創造学」の実施と改善 ① 小中高12年間の系統的教育課程の実施と検証 ② 新設教科「地域創造学」の評価規準と評価方法の実施と検証 ③ 新設教科「地域創造学」の教科書（試案）に基づく実践・改善 (2) 小中高の系統的指導のための各種合同研修会等の実施 ① 小中高12年間の実践交流と研究協議 ② 授業実践を基にした新設教科「地域創造学」と既存の教科の関係性についての分析・探究 ③ 社会的実践力の育成に向けて、主体的かつ意欲的に授業に取り組ませる指導方法の工夫・改善 ④ 授業実践を通じた教材の開発と改善 ⑤ 児童生徒が校種や学校をまたいで交流できる取組の実施・改善 ⑥ 研究のまとめ（成果と課題）を町ホームページ等を通して公開、研究成果を次年度へ還元する方策の提示 (3) 社会的実践力の把握と分析 ① 児童生徒、教職員、保護者・地域住民へのアンケート調査 ② 各種調査（全国学力・学習状況調査等）との関連についての分析・評価 ③ 教育達成調査における12の資質・能力の児童生徒の変容等についての小・中・高教員による詳細な分析 (4) 研究開発実施に関する体制の整備 ① 運営指導委員会による評価をもとにした延長指定第1年次のまとめ ② 教育研究所保小連携部会を中心に、保小が連携して第1ステージの保育・教育の在り方を検討
第二年次	(1) 新設教科「地域創造学」の実施と改善 ① 小中高12年間の系統的教育課程の実施と検証 ② 新設教科「地域創造学」の評価規準と評価方法の実施と検証 ③ 新設教科「地域創造学」の教科書（試案）に基づく実践・改善 (2) 小中高の系統的指導のための各種合同研修会等の実施 ① 小中高12年間の実践交流と研究協議 ② 授業実践を基にした新設教科「地域創造学」と既存の教科の関係性に

	についての分析・探究 ③ 社会的実践力の育成に向けて、主体的かつ意欲的に授業に取り組ませる指導方法の工夫・改善 ④ 授業実践を通じた教材の開発と改善 ⑤ 児童生徒が校種や学校をまたいで交流できる取組の実施・改善 ⑥ 研究のまとめ（成果と課題）を町ホームページ等を通して公開、研究成果を次年度へ還元する方策の提示 （３）社会的実践力の把握と分析 ① 児童生徒、教職員、保護者・地域住民へのアンケート調査 ② 各種調査（全国学力・学習状況調査等）との関連についての分析・評価 ③ 教育達成調査における12の資質・能力の児童生徒の変容等についての小・中・高教員による詳細な分析 （４）研究開発実施に関する体制の整備 ① 運営指導委員会による評価をもとにした延長指定第２年次のまとめ ② 教育研究所保小連携部会を中心に、保小が連携して第１ステージの保育・教育の在り方を検討
第三年次	（１）新設教科「地域創造学」の実施と改善 ① 小中高12年間の系統的教育課程の実施と検証 ② 新設教科「地域創造学」の評価基準と評価方法の実施と検証 ③ 新設教科「地域創造学」の教科書に基づく実践・改善 （２）小中高の系統的指導のための各種合同研修会等の実施 ① 小中高12年間の実践交流と研究協議 ② 授業実践を基にした新設教科「地域創造学」と既存の教科の関係性についての分析・探究 ③ 社会的実践力の育成に向けて、主体的かつ意欲的に授業に取り組ませる指導方法の工夫・改善 ④ 授業実践を通じた教材の開発と改善 ⑤ 児童生徒が校種や学校をまたいで交流できる取組の実施・改善 ⑥ 研究のまとめ（成果と課題）を学校公開研究会等を通して公開、研究成果を次年度へ還元する方策の提示 （３）社会的実践力の把握と分析 ① 児童生徒、教職員、保護者・地域住民へのアンケート調査 ② 各種調査（全国学力・学習状況調査等）との関連についての分析・評価 ③ 教育達成調査における12の資質・能力の児童生徒の変容等についての小・中・高教員による詳細な分析 （４）研究開発実施に関する体制の整備 ① 運営指導委員会による評価をもとにした延長指定第３年次のまとめ ② 教育研究所保小連携部会を中心に、保小が連携して第１ステージの保育・教育の在り方を検討

(2) 評価に関する取組

	評価方法等
第一年次	(1) 運営指導委員会（年3回）の開催 ① 延長指定第1年次の研究についての指導・助言を受けた研究成果のまとめ ② 延長指定第2年次以降の教育課程についての検討 (2) 第5年次の評価を基に実践的研究を行い、児童生徒の変容等を評価 ① 「非認知的能力の見取り」及び「認知的能力の測定」双方の実施 ② 教育達成調査、パフォーマンス評価等を用いた児童生徒への学習評価の実施 ③ 全国学力・学習状況調査、岩手県小・中学校学習定着度状況調査、岩手県中学1年生英語確認調査(CAN-D0テスト)、岩手県中学校新入生学習状況調査、岩手県高等学校1年・2年意識調査等を、新設教科「地域創造学」の目指す資質・能力の観点から分析、評価 ④ 児童生徒、教職員、保護者・地域住民へのアンケート調査による社会的実践力の把握と分析 ⑤ 県立住田高等学校の卒業生に対する進学・就職状況、社会的実践力に関するアンケート等の追跡調査の実施 (3) 小・中・高等学校の一貫した教育課程の在り方について、各校の実践事例交流と、成果・課題の明確化 (4) 小・中・高等学校教員が参加する全体会を4月・2月に、教職員研修会を7月に開催する。
第二年次	(1) 運営指導委員会（年3回）の開催 ① 延長指定第2年次の研究についての指導・助言を受けた研究成果のまとめ ② 延長指定第3年次以降の教育課程についての検討 (2) 延長指定第1年次の評価を基に実践的研究を行い、児童生徒の変容等を評価 ① 「非認知的能力の見取り」及び「認知的能力の測定」双方の実施 ② 教育達成調査、パフォーマンス評価等を用いた児童生徒への学習評価の実施 ③ 全国学力・学習状況調査、岩手県小・中学校学習定着度状況調査、岩手県中学1年生英語確認調査(CAN-D0テスト)、岩手県中学校新入生学習状況調査、岩手県高等学校1年・2年意識調査等を、新設教科「地域創造学」の目指す資質・能力の観点から分析、評価 ④ 児童生徒、教職員、保護者・地域住民へのアンケート調査による社会的実践力の把握と分析 ⑤ 県立住田高等学校の卒業生に対する進学・就職状況、社会的実践力に関するアンケート等の追跡調査の実施 (3) 小・中・高等学校の一貫した教育課程の在り方について、各校の実践事例交流と、成果・課題の明確化 (4) 小・中・高等学校教員が参加する全体会を4月・2月に、教職員研修会を7月に開催する。

第三年次	(1) 運営指導委員会（年3回）の開催 ① 延長指定第3年次の研究についての指導・助言を受けた研究成果のまとめ ② 次年度以降の教育課程についての検討 ③ 社会的実践力を育むことを目的とした、全国向け授業公開研究会の開催 (2) 延長指定第2年次の評価を基に実践的研究を行い、児童生徒の変容等を評価 ① 「非認知的能力の見取り」及び「認知的能力の測定」双方の実施 ② 教育達成調査、パフォーマンス評価等を用いた児童生徒への学習評価の実施 ③ 全国学力・学習状況調査、岩手県小・中学校学習定着度状況調査、岩手県中学1年生英検(IBA)、岩手県中学校新入生学習状況調査岩手県高等学校1年・2年意識調査等を、新設教科「地域創造学」の目指す資質・能力の観点から分析、評価 ④ 児童生徒、教職員、保護者・地域住民へのアンケート調査による社会的実践力の把握と分析 ⑤ 県立住田高等学校の卒業生に対する進学・就職状況、社会的実践力に関するアンケート等の追跡調査の実施 (3) 小・中・高等学校の一貫した教育課程の在り方について、各校の実践事例交流と、成果・課題の明確化 (4) 小・中・高等学校教員が参加する全体会を4月・2月に、教職員研修会を7月に開催する。
-------------	---

3 研究開発の内容

(1) 教育課程の編成に向けて

本研究開発は、町内の小・中学校及び県立学校が町教育研究所と連携し、自立して生き抜く力を身に付け、他者と協働してより豊かな人生や地域づくりを主体的に創造することのできる人材の育成を目指し、取り組むものである。全ての校種が目指す資質・能力「社会的実践力」を12年間という長いスパンで育成していくために、小学校から高等学校までが一貫して地域資源を学習材とした横断的で探究的な学習活動に取り組む新設教科「地域創造学」を中核に据えた教育課程を編成した。

① 社会的実践力について

本研究においては、育成を目指す「社会的実践力」を以下のように定義した。

【社会的実践力】

児童生徒が変化の激しい社会において、充実した人生を実現するために、豊かな心を持ち、主体的に未来社会を創造していくことができる力

我々が育成を目指す社会的実践力は、地域資源を学習材として横断的で探究的な学習活動が展開されることにより培われていくものである。そこでまず我々は、社会的実践力が様々な側面や要素を持ち合わせた資質・能力が螺旋的に関わり合いながら培われていく資質・能力であるとの立場に立ち、社会的実践力を形作っている資質・能力は何かについての検討から着手した。

研究開発指定第1年次（平成29年度）は、各校で検討した「地域創造学で育成すべき資質・能力」を町教育研究所が分析・整理し、育成すべき社会的実践力を構成する資質・能力

の分類を3つ（自律的活動力、人間関係形成、社会参画に関する力）と定義し、それに基づき更に細分化した9つの資質・能力を目指す方向性として確認した。

研究開発指定第2年次（平成30年度）は整理した9つの力を基に、新設教科「地域創造学」の指導を開始し、授業実践を基に、社会的実践力として形作られていく様々な資質・能力に関わるさらなる検討を重ね、最終的に【表3－1】のように、12の資質・能力として規定した。これらの12の資質・能力は、「地域創造学においては何を理解して何ができるようになるか」という知識・技能に相当するもの、汎用的スキルに相当するもの、態度・意欲・学びの価値に相当するものに明確化し、知識・技能に相当する資質・能力を「地域理解」、これ以外の11の資質・能力を「社会参画に関する資質・能力」、「人間関係形成に関する資質・能力」、「自律的活動に関する資質・能力」という大きく三つの側面から分類した。「地域理解」以外の11の資質・能力については、汎用的スキルに相当するもの（☆で表示）として七つの資質・能力（見通す力、多面的・多角的に考える力、提案・発信する力、伝え合う力、協働する力）を位置付け、態度・意欲・学びの価値に相当するもの（★で表示）として四つの資質・能力（好奇心・探究心、困難を解決しようとする心、他者受容、自己肯定感）を位置付けた。

併せて、地域創造学において育成を目指す社会的実践力は、それぞれ独立して育成されるものではなく、地域理解の資質・能力と相互に関連付けられ、重なり合いながら育成される資質・能力として定義した。【表3－2】は、社会的実践力を構成する資質・能力の分類とともに、12の資質・能力のそれぞれについて、具体的に示したものである。

【表3－1】社会的実践力を形作る12の資質・能力

社会的実践力	A 地域理解		他教科等との汎用性
	B 社会参画に関する 資質・能力	☆見通す力	
		☆多面的・多角的に考える力	
		☆提案・発信する力	
		★好奇心・探究心	
		★困難を解決しようとする心	
	C 人間関係形成に関する 資質・能力	☆伝え合う力	
		☆協働する力	
		★他者受容	
	D 自律的活動に関する 資質・能力	☆自己を見つめる力	
		☆調整する力	
		★自己肯定感	

【表３－２】社会的実践力を構成する資質・能力の分類

【社会的実践力】児童生徒が変化の激しい社会において、充実した人生を実現するために、豊かな心を持ち、主体的に未来社会を創造していくことができる力

☆ 汎用的スキル ★ 態度・意欲・学びの価値

A 地域理解 自分たちの地域の自然や人々のくらしの様子、歴史や文化、現状や抱えている課題、活用資源を理解し、ふるさとに愛着をもちながら町の発展・創造に関わる自分の役割等を捉える資質・能力			・地域づくりの基盤となる、地域の事象への基礎的な理解。 ・地域を創造する主体である、自己の役割への理解。
B 社会参画に関する資質・能力 地域の事象（ひと・こと・もの）の理解に基づき、身の回りにある課題や問題を捉え、これからの地域の在り方や、よりよい社会づくりについて提案・発信することに関する資質・能力	1 ☆見通す力	【☆見】	・自分や集団にとっての課題や問題を発見する問題発見力。 ・目標の達成に向かって、解決の道筋を見通し計画する力。
	2 ☆多面的・多角的に考える力	【☆多】	・事象の特色や関連、意味や意義などを考察する力。 ・問題解決のために何を活用して何を行うか構想したり判断したりする力。
	3 ☆提案・発信する力	【☆提】	・よりよい地域づくりに向けた取組を提案する力。 ・考察したことや構想したことを効果的に発信する力。
	4 ★好奇心・探究心	【★好】	・身の回りや地域の事象に興味・関心を持つ態度。 ・知りたいことや解決したいことをみつけようとする態度。
	5 ★困難を解決しようとする心	【★解】	・失敗してもあきらめずに挑戦しようとする態度。 ・困難な場面に直面しても粘り強く取り組み、最後までやり遂げようとする態度。
C 人間関係形成に関する資質・能力 学びを深めたり、目標の達成を行ったりするために、他者とよりよく関わり協力することに関する資質・能力	1 ☆伝え合う力	【☆伝】	・考察したことや構想したこと等を、工夫しながら伝え合う力。 ・他者との対話の中で、自己の考えを広めたり深めたりする力。
	2 ☆協働する力	【☆協】	・目標達成に向かって、他者と協力して活動する力。 ・議論し合ったり、集団活動を統制したりする力。
	3 ★他者受容	【★受】	・多様な他者の考えや価値観、立場を受け入れる態度。 ・相手を尊重したり敬意を抱いたりしようとする態度。
D 自律的活動に関する資質・能力 自分自身の置かれている状況や考えていること、感じていることなどを認識し、それに応じてよりよい方向に調整しながら学びや活動を推進することに関する資質・能力	1 ☆自己を見つめる力	【☆自】	・自己の学びの状況や、成果・課題を客観的に把握し認識する力。 ・自己を見つめ、自己の変容や成長を捉える力。
	2 ☆調整する力	【☆調】	・自分の学びや活動をよりよいものになるよう調整しようとする力。 ・自分の学びを調整しながら思いや目標の実現に向かって活動する力。
	3 ★自己肯定感	【★肯】	・学びの過程を省察したり、やり遂げた達成感を味わったりしながら自分のよさを捉えようとする態度。 ・自分の可能性を前向きに受け止め、よりよいものを目指して取り組もうとする態度。

本町における一貫した教育課程の編成をとおして、目指す資質・能力を育成していく上での最も重要な考え方の一つに、子どもたちの発達段階を踏まえ、接続学年の系統性を大切に、育ちと学びを滑らかに接続していくことが挙げられる。そこで、地域創造学の特性を生かし、教科横断的な視点から、校種間、異校種間の接続を図ることにより、着実に社会的実践力が育まれていくよう、発達段階を保育園の年長児も含めた五つのステージのまとまりで編成した【表３－３】。

【表３－３】発達段階に応じて編成した五つのステージ

- ・第１ステージ：保育園年長児、小学校１年、小学校２年
- ・第２ステージ：小学校３年、小学校４年、
- ・第３ステージ：小学校５年、小学校６年、中学校１年
- ・第４ステージ：中学校２年、中学校３年、高等学校１年
- ・第５ステージ：高等学校２年、高等学校３年

さらに、12年間をとおして、町全体で目指す子どもたちの育ちの姿を俯瞰しながら、地域創造学で育てたい資質・能力の確実な育成に向け、本研究開発の根幹となる社会的実践力の系統表を作成し、五つのステージにおける社会的実践力について、その系統性を明らかにした【表３－４】。この表に示したものは、各ステージにおける発達段階に応じた学びの様相としてまとめているものであり、到達目標という意味合いというよりは、子どもたちの学びの姿を目安として整理したものである。研究開発指定第３年次（令和元年度）からは、これらの資質・能力及び系統表に基づいて授業実践を進め、第５年次（令和３年度）末までの３年間の取組における成果や課題、実践からわかってきた児童生徒の実態等に応じて、さらに12の資質・能力及び系統表の見直しを図った。具体的には、自律的活動のための要素としての「メタ認知」と「調整力」を適切に評価していくために、これまで規定していた「感じ取る力」を「自己を見つめる力」に、「創出する力」を「調整する力」に改訂し、研究開発延長指定第１年次（令和４年度）から延長指定第３年次（令和６年度）までの３年間、小学校から高等学校まで全ての校種において改訂した社会的実践力の系統表【表３－５】、年間指導計画に基づいて実践を行った。

【表3-4】各ステージにおける社会的実践力の系統表

[illegible]

② 地域資源を学習材とした系統的な学びの在り方について

【地域創造学の目標】

住田町及び近郊地域社会をフィールドにした横断的・総合的な学習を、探究的な学習活動を意図的・計画的に行うことを通して、新しい時代を切り拓き、社会を創造していくための社会的実践力を身に付けた心豊かな人材を育成することを目指す。

上記の目標にある通り、地域創造学においては、住田町及び近郊地域社会に溢れる地域資源を学習材にして、小・中・高の児童生徒が、探究的な学習活動を意図的・計画的に行っていく。

「意図的」とは、その時期だからこそ学ぶ意義や価値が大きい学習内容を、ふさわしい学びのステージに位置付けることである。「計画的」とは、学習内容のつながりや学習方法、児童生徒の資質・能力の系統性を吟味して位置付けることである。具体的な学習内容に関しては、以下のようなものが例として考えられる。あくまで数多く考えられる具体例の中の一部であり、本研究開発の根幹である各ステージにおける社会的実践力の系統表を基に、町全体で目指す子供たちの育ちの姿を俯瞰しながら、小・中・高の各ステージにおいてどのような学習を位置付けることが系統的な学びにつながるのかについて吟味し、教師が意図的に指導計画に位置付けていく必要がある。

【学習内容（例）】

- ・住田の産業を通してこれからの町づくりを考え、発信する学習
- ・住田町のよさや抱えている課題を学び、実践的な行動を通して地域へ貢献する学習
- ・住田固有の有形無形の文化遺産や、先人の残した文化的業績の価値を享受する学習
- ・住田と世界のつながり等に目を向ける国際理解に関する学習
- ・地域の中でふるさとの発展のために力を注ぐ人々から生きる事や働くことの意味を学ぶ学習
- ・学校や地域が一体となって取り組む活動へと発展的に広がる学習

③ 学習指導要領解説地域創造学編及び年間指導計画について

研究開発指定第3年次（令和元年度）から、小学校から高等学校までの全ての校種において、社会的実践力の系統表を基に作成した単元計画及び学習指導要領解説地域創造学編に基づいて授業を進めた。特に、小・中学校における単元計画では、それぞれの学年に「共通単元」を設定し、二つの小学校の児童・生徒同士の交流場面の創出にも取り組みながら、実践を重ねてきた。

これまでの授業実践及び授業研究会等を通じて、各ステージにおける社会的実践力の系統表と照らし合わせながら、年間指導計画及び単元計画が社会的実践力を育成していくための内容となっているか、系統性を重視したものとなっているか等について「学習指導検証部会」を中心に議論を重ねた。系統的な学びを意図的に位置付けた計画となるよう、小学校から高等学校までの全ての校種が集まり、定期的に見直しの機会を設定し、単元設定の理由をより明確にするための様式等を含めて、年間指導計画及び単元計画の修正を常に図っている【表3-6】。今後も、修正を図った年間指導計画及び単元計画に基づき、児童生徒が自身のプロジェクトを実現する過程において、どのようなプロセスの中で社会的実践力に関わる変容や実践に結び付いていったのかを検証していく。

【表3-6】単元計画表 小学4年生「人にやさしい町 住田」（一部抜粋）

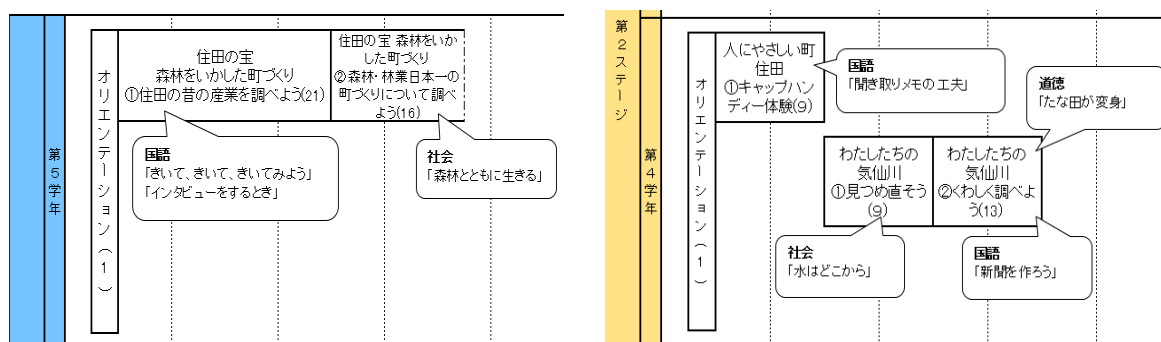
6 単元の指導

月	小単元名	プロセス	時	ねらい	主な学習活動 (◇ 指導上の留意点)	評価 (評価方法)
4月・5月	一次「キャップハンディー体験をしよう」(9時間)	問題の把握・現状の理	1	テーマ「人にやさしい町 住田」について考えを出し合い、地域の福祉について調べる計画を立て、見通しをもつことができる。	① 高齢者や障がいのある人の生活について、経験したことや資料をもとに話し合う。(ウエビングマップ等) ② 高齢者や障がいのある人たちが大変なことや困っていることについて考える。 ③ 地域の福祉について調べてみたいことを話し合い、単元の探究の見通しをもつ。	B1: 見通す (高齢者や障がいのある人についての話し合いの際の発言・学習シート)
		課題への気付き・情報収集	3	高齢者や障がいのある人のくらしに関わることにについて知り、地域の福祉への興味・関心を高めることができる。	① 地域の福祉について調べる内容や方法について話し合う。 ② 住田町社会福祉コーディネーターを招き、住田町の施設の様子や介護状況、高齢者や障がいのある人たちの様子や気持ちを聞く。(住田町社会福祉協議会(46-2300)) ③ 調べたことをまとめ、高齢者や障がいのある人たちのくらしに関わる課題を見出す。	B1: 見通す (高齢者や障がいのある人のくらしに関わることにについての記述・学習シート) C3: 他者受容
		情報収集	5	キャップハンディー体験を行い、高齢者や障がいのある人の大変さや気を付けること等について調べることができる。	① 住田町社会福祉コーディネーターに依頼し、キャップハンディー体験を行う。(講話・体験) ② キャップハンディー体験を通して、高齢者や障がいのある人たちの大変さや体を動かす際に気を付けることについてまとめる。 ③ 体験活動を振り返り、地域の福祉についてさらに調べたいことについて話し合う。	B4: 好奇心・探究心 (振り返りの記述) C1: 伝え合う

④ 地域創造学で育む社会的実践力と各教科等で育む資質・能力の関連について

地域創造学で育む社会的実践力を支える資質・能力のうち、「B 社会参画に関わる資質・能力」「C 人間関係形成に関わる資質・能力」「D 自律的活動に関わる資質・能力」の11の資質・能力(汎用的スキル及び態度・意欲・学びの価値)は、各教科等においても育まれる関連能力である。地域創造学と各教科との関連を検討し、現場の教員が各教科との関連を意識し活用しやすくするために、各教科等の単元との関連について作成した各教科等との関連検討表【表3-7】も意識して授業実践を行った。地域創造学におけるこれまでの指導により明らかになった成果や課題を、各教科の指導にも生かす視点を整理し、教育課程全体における指導方法及び児童生徒の学習方法の改善を図っていく。

【表3-7】地域創造学と各教科との関連検討表（一部抜粋）



（２）地域創造学の特質を生かした学習指導の展開について

地域創造学では、目指す資質・能力を育むため、学びの場を校内に限定することなく、児童生徒の学習課題に応じた体験等を取り入れた学習、役場や企業等の多くの地域人材が積極的に関わる学習等、多様な学習活動を展開してきた。多様な学習活動が展開される共通点として、以下のようなものがあげられる。

- ・地域人材との交流や体験等の位置づいた学習が展開されること。
- ・児童生徒の学習課題に応じた複線的な学習過程が組み立てられること。
- ・児童生徒の学習課題に応じた学習過程が組み立てられること。
- ・各ステージの特性を生かした学習が展開されること。

① 体験活動を伴う学習活動の指導方法の在り方について

児童生徒が学びの意義や価値について実感を持ちながら学習が展開できるよう、特に体験活動を伴う学習活動の指導方法の在り方について考える実践を展開した。

【表３－８】は、各校種で地域創造学に位置付けた主な体験活動の種類をまとめたものである。第１ステージから第２ステージは、地域のよさに気づき地域理解を深める活動を中心に、第３ステージから第５ステージにかけては町の課題に対して児童生徒が主体的に向き合い、課題を知ることや課題解決に取り組む探究活動を取り入れていくことができた。各ステージにおける社会的実践力の系統表を基に、ステージの段階によって何を目指していくのかについて、引き続き校種を越えてさらに議論を重ね、共通理解を図っていく。

【表３－８】地域創造学に位置付けた主な体験活動

小学校	中学校	高等学校
学校探検、植物の栽培、町探検、郷土芸能、水生生物調査、キャップハンディ体験、野外活動（種山高原）、町のよさや課題を考える活動（町内でのリサーチ、まとめ）等	町の魅力を高めるためのプロジェクト活動（町内でのリサーチ、プラン作成と実践等）、職場体験等	町の課題を解決するためのプロジェクト活動（町内、町外でのリサーチ、プラン作成と実践）等

② 他地域や類似の事例に学ぶ

地域創造学は、住田町及び近郊地域をフィールドに学習するが、住田町でみられる事象には、日本各地に共通する課題もある。そこで、国内や世界の事例からヒントを得るなど、視野を広げて住田町を見つめることも重要である。今後も、発達段階に応じて、他地域の事例は、なぜ成功したのか、住田町との共通点や相違点は何か、住田町に活かせることは何か、住田町の強みは何か等、他地域の事例から、住田町の良さに気付いたり、郷土への愛着が育まれたりすることも期待される。

③ 住田型探究のプロセスの実施について

将来遭遇する様々な問題場面においては、簡単に解決策が見出せないような課題についても、子どもたちが主体的な姿勢で、他者と協働しながら解決を目指していく資質・能力を育成できるようにすることが重要である。本町においては、学習活動をとらえて資質・能力を育成できるよう、これまでの研究実践において、子どもたちにとってよりよい探究のプロセスを探

ってきた。

まず、町内の児童生徒の探究活動の実態を基に、収集した情報や体験活動等から得た知識や考えを具体的に整理したり、分析・考察したりする過程を一層重視する必要があると判断したことから、研究開発指定第2年次（平成30年度）から、試案として「①課題の設定、②情報の収集、③アイディアの拡散と収束、④アイディアの具現化、⑤改善、⑥まとめと振り返り」という六つのプロセスを設定し、児童生徒の探究活動が質的に深まっていくよう、発展的に繰り返される「探究的な学習過程」を重視した学習を展開した【表3-9】。

【表3-9】平成30年度の実践において活用した地域創造学における基本の探究のプロセス

① 問題の理解	② 情報収集	③ アイディアの 拡散と収束	④ アイディアの 具現化	⑤ 改善	⑥ まとめと 振り返り
・見る、聴く ・理由や根拠を問う ・気づく ・共感する	・調べる ・整理する ・分析する ・課題を焦点化する	・解決案を発想する ・解決策を組み立てる ・解決策を見なおす	・解決策の実施計画を構想する ・解決策を実践する	・実践を対象の立場から問い直す ・実践に不足していることを付け加える ・実践を修正してやり直す ・実践を繰り返す	・実践の成果と課題をまとめて発表する ・実践後の自分の思いや願いを伝える ・学びの意味や価値を表現する

そして、平成30年度の実践の結果、一般的な探究のプロセスは、「問題の理解」をスタートとし、「課題設定」、「情報収集」と進んでいくことが多いが、プロセスはいつでも一方とは限らず、時に「実施・改善」と「見通しを持つ」のプロセスが往還されたり、「問題の理解」からではない段階が起点となって学びが始まったりすることが明らかになった。

そこで令和元年度からは、新たに本町における「探究の六つのプロセス」を設定して、実践を進めてきた。地域創造学では「①現状把握・問題の理解、②課題設定・課題への気づき、③情報収集、④見通しを持つ・計画する、⑤実施・改善、⑥まとめ・振り返り」というプロセスが発展的に繰り返される「探究的な学習過程」を重視した学習を展開している。また、六つのプロセスは①から⑥へ向かう一方に限定せず、児童生徒の進行状況を詳細に見取りながら、学習状況に応じてプロセスを往還することなども含めて、探究活動を柔軟に行わせている。

【本町における探究の六つのプロセス】



授業実践例 有住小学校 4 年生 「人にやさしい町 住田」

各単元等における「振り返り」を明確に位置付けて、児童生徒が自覚的に自身の変容を振り返ったり、教師が児童生徒の変容を見取って価値づけたりする機会を大切にすることで、地域の福祉に関わる方の話やキャップハンディ体験等を通して得た学びの振り返りから、町の取組や福祉の仕組みへの関心が高まり、新たな課題をもって視野を地域に広げようとする社会的実践力「好奇心・探究心」があらわれている記述が見られた。

「人にやさしい町 住田」

4年

1 さんのお話や、体験で心に残ったこと。



これは車いすに
すわって、おしえてもら
っている所です。
おしえてのたんさんが、車い
すだと、おすのが、苦ろうし
ます。

これは、アイマスクをして
歩く、ということです。
まっくらで、物がある所
もわからないので、つえ
で、物があるかかくにん
します。

これは、スロープとい
います。
車いすが、とある時に、
べんりです。
これは、しとうようけんか
の、スロープです。

2 「人にやさしい町」ってどんなことだろう。

おとしよりや、しょうがいがある人
 支えられられる田舎、おとしより、しょうがいがある人さ、
 支えられにえらぶまちだ"と、
 思いました。
 〆 この表現、おとしよりと
 まじりあいます。
 また、おのまわりの人や、こまっている人を
 思いあうまち。

3 単元を通して学んだこと、もっと知りたくなったこと。

町で、車いすの人が、住みやすいくふうが、
とれくらゐあるのかかぎになりました。
学校の、くふうは、しょうこうろ、ホール、体育館
の、スロップ、エレベーター、かいだんの、手すり、
を、見つけました。

→ 落着いせなとろは、とうでらうね?

そうだね。さんが言うとおり、「思いやりもち」のように入の心の面と、「住みやすい工夫」のようは、かんまよう面との両方が、そうだと、とてもいいのだと思います。

探究活動を進めていくうえで、生徒が自身のプロジェクトを実現するそれぞれのプロセスの中で、どのようなことに困難を抱き、どのように乗り越えていったのか、教師はそれぞれのプロセスにおいて、どのような指導・支援を大切にすることが、児童生徒の社会的実践力に関わる変容や実践に結びついていったのかという視点も重要である。研究開発延長指定第2年次（令和5年度）から延長指定第3年次（令和6年度）にかけて、学習指導・評価検証部会が中心となり、児童生徒が「探究の六つのプロセス」を意識しながら、自身の探究のプロセスを主体的に振り返られるように、各プロセスで目指す児童生徒の姿について可視化するため、住田型探究のプロセス「名人カード（小学校）、学びのコンパス（中学校）」を作成し活用を図った。実践を通していく中で、児童生徒自身が探究のプロセスを自覚化するとともに、プロセスを可視化したことで、本時がどのプロセスであるかを捉えることができる児童生徒も多く見られるようになった。

住田型探究のプロセス「名人カード」小学校

たのしい探究のプロセス	①しる・つかむ	②かだいきたてて・きづく	③しらべる・あつめる	④けいかきたてて・みとおす	⑤やってみる・みなおす	⑥まとめる・ふりかえる
学習カード	わたしたちのまちの「いいところ」って何だろう	わたしたちのまちの「いいところ」について話し合おう 調べる計画を立てよう 「いいな　すごいな」を伝えよう	たんけんに行ってきたわたしたちのまちの「すごいところ」を調べよう いろいろなじょうほうを集めよう	「すごいところ」を見つけてためめのたんけんに行くじゅんぎをしよう どのように伝えたいのだろう。	これまでの学習をふりかえり、くわしく調べたり、よりよくまとめたりする方法を考えよう 世小に伝える練習をしてみよう	調べたことをまとめてしようかいしよう 「わたしたちのまちならではのよさ」についての自分の考えをまとめよう 世小と伝え合おう
名人になるためのポイント	 2年生の「いいな　わたしたちのまち」の学習を思い出そう わたしたちのまちの「いいところ」は？ どうして、そう思ったの？	 友だちの考えはどうかな。自分と同じかな。くらべてみよう。 どうしてその場所を調べたいと思ったのかな？ 世小の3年生をびっくりさせよう。	 どんなところか？　気をつけて調べたら「すごいところ」が見つかるかな？ そこにかかわる人には、どんな思いやねんがあるのかな？	 「すごいところ」を伝えるために、もっとくわしく調べたいところは何かな？ どうすれば、分かったことや感じたことをよりよく伝えることができるかな？	 世小の3年生は、よろこんでくれるかな？ 伝える方法には、どんなものがあるかな？　どんな伝え方（まとめ方）をしたら、よく伝わるかな？ 世田米のことも知れば、住田名人だね。	 どんなところが「すごい」と思うかな？ どんなことができるようになるかな？ どうやったらできるようになるかな？
 すごい！	□気づいたことや考えたことをおけに入れてみんなに伝えることができた。	□くわしく知りたいことを決め、聞きたいことを考えることができた。 □わけをはっきりさせて、伝えたいことを決めることができた。	□だれに聞けばひつようなじょうほうを得ることができ、聞きたいことを自分で考えて、聞き取ることができた。	□前のたんけんよりレベルアップできるめあてや、やそくを考えることができた。 □伝える方法をいろいろ考え、決めることができた。	□「すごいところ」を伝えるために必要なことを見つけて、じっさいに活動することができた。 □友だちの発表やアドバイスから、自分の発表をレベルアップできた。	□アドバイスを生かして、調べたことを絵や写真を用いて相手に伝えるようなくふうをしてまとめることができた。 □住田のすごいところについて、わけを入れて自分の考えをもつことができた。
いいね	□気づいたことや考えたことをみんなに伝えることができた。	□くわしく知りたいことを決め、聞きたいことを決めることができた。 □伝えたいことを決めることができた。	□そこにかかわる人からひつようなじょうほうを聞き取ることができた。	□たんけんのめあてや、やそくを考えることができた。 □伝える方法を決めることができた。	□くわしく調べたいことを見つけて、伝えることができた。 □自分の発表のアドバイスがわかった。	□たんけんのよかったことや、感じたことをふりかえることができた。
2次・3次は青色の文字をみましょう						*ここからはじめてもよいのです。 たちどまったり、もどったりしてもよいのです。

3年 番 氏名 ()

探究の6つのプロセス	現状把握 問題の理解	課題設定 課題への気づき	情報収集	見通しを持つ 計画する	実施・改善	まとめ（発表会）	振り返り
学びの名段階	・住田町の将来を創造するうえで、現在どのような課題があって、どのような取組がなされているのだろうか？	・数ある課題の中で、自分は何んな課題についてテーマを設定してみようかな？	・自分の課題（テーマ）を決めるためにはどのような情報を集めればいいのか？	・見通しをもった学習を進めるためにはどのような学習を進めていけばいいのだろうか？	・学習を進めてみたら、課題がばやけていたな～ももう一度、課題を整理してみようかな？調査をやり直してみようかな？（提案・発信）	・こんな課題があるんだよね！でも、こんなことが出来たなら住田町がもっと住みやすくなる！（発表・発信）	やっぱり住田町ってすばらしい町だな！これからは郷土の発展の力になりたいな！○○さんの発表がすばらしくかった。自分もあんな発表ができるようにしたいな！
学びのポイント	・設定する課題は一つになりませんが、住田町はどのような課題を抱えているのかについて様々な視点から理解を深めます。	・解決策を探りたい分野を決めて課題を設定します。その際、単に自分の興味関心だけで判断するのではなく、例えば「どの年齢層の方々にどのような課題になっているだろう？」のように考えると課題がしぼられます。	①課題の現状を詳しく調べます。 ②課題を解決するためにはどのような情報を集めればいいのか？（多角的・多面的な見方） ＜注意事項＞ ・アナログとデジタルの両者の良さを大切にしましょう。 （複数の視点から情報収集する） ＊アナログ：実際に現場に出向いたり、住民に聞き取り調査等を行う。図書館で関連資料を見つづける。 ＊デジタル：インターネットの情報で正しいとは限らないので注意する。	・行き当たりばったりにならないように、以下のようない点から時間配分を考えて学習を計画的に進めましょう。 ①情報収集に何時間かかるのか。 ②情報を分析し、表やグラフなどによってまとめるのか。 ③住田町の魅力アップや課題解決のためにどのような取組が考えられるのか。 ④発表に必要な準備としてパワーポイントを作成することになるが、図やグラフ等の理由や根拠となる資料を作成する。	・作成した計画にしたがって学習を進めていきます。その際、計画通りに学習が進まないことがよくあります。学習を終えるたびに、学びを振り返りながら学習計画を修正していきます。	・自分の調査したことや、その分析、考察を図やグラフ等の資料にまとめ、理由や根拠を明らかにして提言を聞く側の人に分かるようにまとめることが大切です。 ・発表は原稿を読むようなことにはならないようにしましょう。	＜振り返りの視点＞ ①地域の課題について新たな理解を深めたこと（地域理解） ②地域の課題について解決策を考へること（社会参画） ③学習を進めていく中でできたか（人間関係形成） ④学習を進めていく中で、力を入れたこと、注意したこと、苦労したこと等（自律的活動） ⑤次年度（高校含）はどのような課題に取り組んでみたいか（次年度への抱負）

学習を自分でコントロールする

※困った時には自分から何で困っているのかを先生と相談してみましょう

時間の計画	時間	時間	時間	時間	時間	時間	時間
時間の計画	4 時間	5 時間	8 時間	6 時間	2 1 時間	8 時間	4 時間



まとめ（発表会）について

こんな住田町になってほしい！！

A段階（もっと高いレベルの発表を目指そう！）

- 理由や根拠を明らかにして調査内容を分析し、自分の考察を加えたうえで、聞く側にわかるようにまとめている
- 調査内容や分析、考察などを図やグラフ等の資料も活用してまとめている
- 他教科で学習した知識・技能を活用してまとめている
- 原稿にとらわれず、状況に応じて表現を工夫している（相手意識）

B段階（全員到達しよう！）

- 理由や根拠を明らかにして聞く側の人にわかるようにまとめている
- 調査内容や分析、考察などを図やグラフ等の資料も活用してまとめている
- 原稿の読み上げではなく、自分の言葉で発表している

④ 児童生徒同士の校種間交流について

地域創造学においては、地域創造学学習指導要領解説や各ステージにおける社会的実践力の系統表、年間指導計画及び単元計画等に基づき、町全体の小・中・高で目指す資質・能力や内容、指導方法及び評価方法を共有している利点を生かし、単元の内容に応じて積極的に校種間交流を行っている。それぞれの小学校の児童が共通単元に基づいて合同で実地調査を行ったり、それぞれの学区に関わる「地域の歴史」を発表したりして深め合う同校種間交流を行っている。さらに、小学生と中学生の児童生徒、中学生と高校生の生徒同士が互いのプロジェクトを参観する異校種間交流では、プロジェクトの進捗状況や成果物について評価し合ったり、後輩が探究活動の質を更に高めるために先輩にアドバイスを求めたりする姿が見られた。同校種間で学びを深め合うことはもちろんのことであるが、異校種の先輩や後輩と共に学び合うことも、児童生徒の学習意欲に前向きな効果を与えるものと考えられる。

授業実践例 小学4年生 「わたしたちの気仙川」

本単元の題材である「気仙川」は、農業用水や水力発電、町民の生活で使う水としても利用され、住田町の生活を支える川である。地域の人々は気仙川を誇りに思い、定期的に河川の清掃活動を行うなど、地域が一体となって保全活動に努めている。

この単元では、発表会にとどまらず、フィールドワークやゲストティーチャーを招いての情報収集などを2校の小学校合同で行った。学習を進めていく中で、両小学校の児童それぞれの視点からの発言やつぶやきに触れ、互いに新たな気付きや発見を得ることができた。気仙川が自分たちにとってどのような存在であるかに気付くとともに、川を守ろうとする人々との関わりを通して、自分たちも気仙川を大切にしようとする気持ちを抱いていた。また、長年、気仙川の水害から町を守り、町民の生活を支え続けた町の中心部に架かる昭和橋へ感謝の気持ちを伝えたいという実践にもつながった。同一単元内で学習内容を揃え、探究活動を合同で行うという同校種連携によって地域理解が深まり、自分の思いや考えを行動化することに至った実践例であると捉えられる。



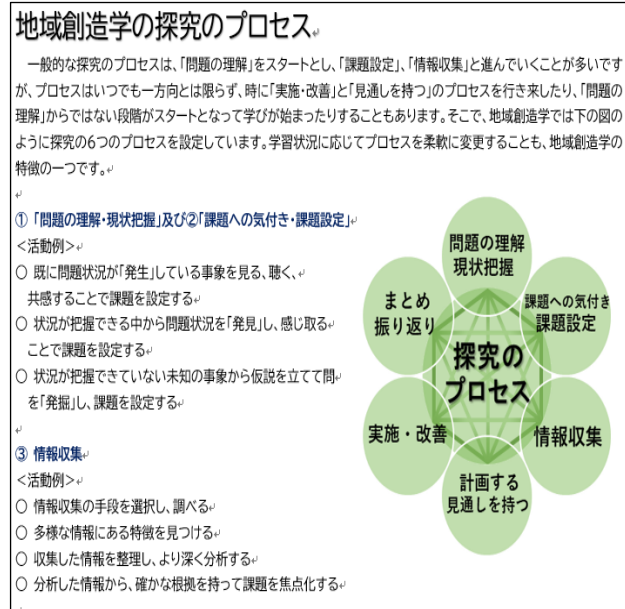
授業実践例 有住中学校・住田高等学校「中高プロジェクト交流会」

探究のプロセスの中で、学んだことを発表する場面では、主体的な活動を通して形成された自己の考えを他者に伝える際、的確に伝わるためには相手意識を持つことが大切な視点であることに留意して指導を行った。その結果、自分が伝えたいことについてポイントを押さえながら発表しようとしたり、聞き役の生徒が発表者の伝えたいことがより伝わりやすくなるようにアドバイスしたりする様子が見られ、学びが深まった。



⑤ 社会的実践力を育成するための地域創造学教科書について

地域創造学において、児童生徒が主体的に探究活動を進めていくために、「探究の六つのプロセス」を大切にした探究の進め方やこれまでの児童生徒のプロジェクト活動等の実践例を記載した教科書の開発・実践を進めた。小学校段階から児童が「探究の六つのプロセス」を意識して探究活動を系統的に進めていくために、教科書が効果的なツールとなり得ることが考えられる。また、「持続可能」の視点で考えれば、地域の教職員が変わっても、教科書を通して教科に対しての理解を深めていくことが可能となり、より持続可能な取組につなげていくことが期待できる。



（３）地域との協働について

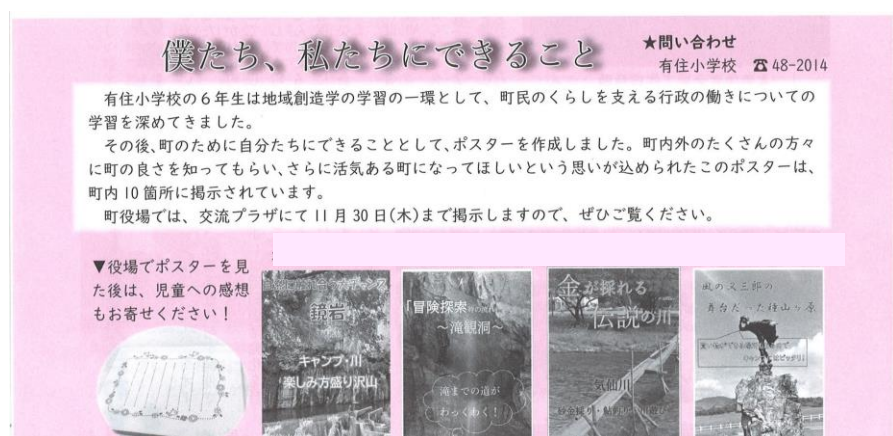
地域をフィールドにした学びである地域創造学では、地域との連携は不可欠である。毎年、延べ約 100 名もの地域の方々にゲストティーチャーやアドバイザーとして協力いただいたことは、児童生徒にとって学びを深める貴重な機会となった。

また、地域創造学協力者会議等、地域創造学のゲストティーチャーとして協力いただいた地域の方々からは、「学びの中で話したり、考えたり、発表したりすることを通して、大人や地域の人たちにも気づきを与えることを期待している」「この町に何が必要で、何をすればよいのか、子どもの頃から考える事が出来るようになってほしい」「自分で考える力、自分で企画して実行できる力を身につけてほしい」「地域について学ぶ中で、子どもたち自身の生き方を考える機会にもなっていると感じる」「生徒が実践するプロジェクト活動は、複数年にまたがる継続性のあるテーマ設定も効果的ではないか」等、貴重な意見をいただいた。このような意見は、学校だけでなく地域全体で地域創造学を進め、地域全体で児童生徒を育てていくという意識の高まりと捉えている。地域創造学及び各教科等の学びにおける「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図る上で、地域創造学に参画する協力者の方々と「探究的な学びのプロセスを経ること」や「児童生徒の自己決定等を促す学習の実現」が、確かな資質・能力の育成にとって大きな意義を持つこと等をより深く理解していくことが不可欠であり、引き続き学校と地域が連携を継続し、地域の方々と地域創造学を行ったことによる児童生徒への効果を共有するとともに、町全体がよりよい教育環境の実現に向けて取り組み続けていくことができるよう、協力者による評価等も取り入れながら実践を進めていく。

授業実践例 小学校6年生 「くらしを支える働き」

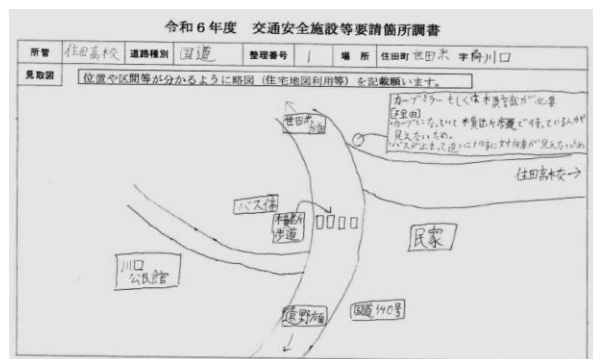
町民のくらしを支える行政の働きについて学習を進めてきた6年生は、住田町の移住支援や子育て支援に携わる方、住田テレビに関わる方々などと実際に対話をしながら学ぶことで、事実だけではなく、取り組む人々の思いや願いに気づくことができた。そして、これまでの学習における学びの「振り返り」から、町が抱えている課題に気づいた子どもたちは、元気ある町にしていきたいという思いから、町をPRするポスターを作成し、住田町内外のたくさんの方々に見てもらえるようにという観点でポスターを貼る場所を考え、様々なお店や観光地へ依頼を行った。課題解決に向けた実践を進めていく過程において、さらに地域の方々に向けて幅広い発信を行う方策を考え、地元のケーブルテレビや町の広報紙を通して、これまでの学びやポスター作成の経緯、自分たちの思いなどを発信した。

学習後、子どもたちは、発信する力が身に付いた、もっとたくさんの人たちに住田町を知ってもらいたいと思った、などという感想をもっており、自分たちにできることは何かと意欲的に考える児童の姿が見られた。



授業実践例 高校2年生 「自分と向き合い、地域に触れる」

住田高校の生徒が地域創造学において、「住田の道路がキレイで安心な道になるまで」を個人テーマに探究活動を行って行く中で、住田町が暮らしやすい町になる一つの方策として、事故無く安心な住田の道を目指し、生徒自身が危ないと感じた場所に、標識やカーブミラーを設置する構想を計画した。そこで、住田町で実施している「交通安全施設点検」に向けた要請書の作成にあたり、何度も町職員とのやりとりを重ねた結果、要請書の提出にまで行動化することができた。現地での交通安全施設点検の結果として、カーブミラーの設置には至らなかったが、付近の道路標示の舗装が行われることとなった。地域創造学の第5ステージにおいては、実現可能性を踏まえた上で、自分たちなりのよりよい地域の在り方を提言していくことを目指している。この実践は、生徒のプロジェクトを地域の大人が本気で受けとめ、実際に点検まで至ったものである。地域創造学において「社会参画」として位置付けている社会的実践力に関わる実践例であると捉えられる。



(4) 評価に関する取組について

① 地域創造学における評価の基本的な考え方

地域創造学においては、児童生徒の学習状況の評価は観点別学習状況の評価を基本とするが、数値的に評価することはそぐわず、児童生徒一人ひとりにどのような資質・能力が顕著に身に付いたかを具体的に文章で記述する個人内評価で把握する。児童生徒一人一人の学習の成立を促すための評価という視点を重視し、学習や指導の改善に生かしていくという、指導と評価の一体化となるサイクルを大切にしていく。

② ポートフォリオ評価

児童生徒の学習の過程や成果等の記録を計画的に集積する手立てとして、町内の小・中・高が共通してワーキング・ポートフォリオ（青色ファイル）とパーマネント・ポートフォリオ（黄色ファイル）の2つのポートフォリオを使い分け、ワーキング・ポートフォリオには1年間の学びを蓄積し、パーマネント・ポートフォリオはそこから精査して残していく資料を12年間つないでいくために活用しており、自分が得た情報や学習内容を整理しながら集積し、単元末や年度末等の場面で、自分の学習を自覚的に振り返るツールとして活用することが各ステージ段階で定着してきている。また、パーマネント・ポートフォリオを活用して過年度の学びを振り返ることで、新たな地域課題に気付いて探究テーマを設定する等、学年間やステージ間の学びをつなぐツールとして有効性を示す事例や、一人一台タブレットを用いて調査活動をしたり、探究活動の交流を行ったり、成果物をデジタルポートフォリオとして作成したりする等、ICT機器を活用して情報を収集したり、蓄積したりする姿も見られる。



ワーキング
ポートフォリオ
(1年分)



パーマネント
ポートフォリオ
(小学校～高校)



③ パフォーマンス評価

児童生徒の学習単元と社会的実践力の系統表を基に、児童生徒の学習単元における目標設定を行い、具体的な児童生の学習過程を想定しながら、評価の観点や評価規準の設定を行う。これを土台として、児童生徒にとってのパフォーマンス課題やルーブリックを分析・検討し、設定する。ルーブリックを児童生徒と教師が共有し、児童生徒自身で評価の視点をわかりやすく捉えることができるようチェックリストを併用する等、引き続き効果的な手立ての検証を図っていく。

(5) 研究開発延長指定第3年次学校公開研究会について

これまでの研究成果を基に、研究発表、授業公開、分科会、講演会を行った。町内の小・中・高の全ての校種において授業公開を行った。分科会は「ステージ（校種）間連携」、「地域人材活用」、「主体的な学び」の3分科会とし、主に「ステージ（校種）間連携」では「地域資源を学習材とした系統的な学びの在り方」や「学び合いによる児童生徒の学びの質の向上」について、「地域人材活用」では「地域との協働」や「多様な他者との関わり」について、「主体的な学び」では「教師の伴走者としての役割」や「住田型探究のプロセス」について協議を行った。

協議には小・中・高の教員だけでなく、地域創造学ゲストティーチャーも参加し、小・中・高の12年間のつながりのある学びを、さらに効果的なものとしていくための指導の在り方や、ゲストティーチャーの有効活用、探究のプロセスの生かし方、地域をどのように巻き込んでいくかなど、様々な視点から、たくさんの貴重なご意見をいただいた。

【学校公開研究会 参観者所感より】

- ・第1～第5ステージにおいて、児童生徒の学びにおける成長を見取るために、「ポートフォリオの蓄積」、「ゲストティーチャーとの連携」といった点が大きな役割を果たしていることを学び、自校においても活かしたいと思います。現在の社会、学校教育の双方に求められていることが地域創造学に含まれていて、地域創造学が子どもの資質や学力の向上につながるのみならず、地域社会にも大きく役立つものであることも学びました。
- ・5年生の授業では、自分の課題を解決するために主体的にゲストティーチャーに質問し、自分の思考と合わせて深まりのある質問に変化していく様子が素晴らしいと思いました。一朝一夕では、そのような姿とはならないので、「学び方を学ばせる」今までの過程、積み重ねがあったのだらうと思います。また、主体的な学びを支えるための伴走者としての教師の役割が大変勉強になりました。
- ・小学校1年生も4年生も、のびのびと授業を受けていたように感じました。地域創造学の実践が始まってから、保育園、小学校と各ステージを経験してきた子どもたちは、これまでも住田町の良さをたっぷりと感じてきたのだらうということがよく分かりました。
- ・地域創造学の実践で積み重ねた子どもたちの学びについて、段階を通して成長が見られる授業でした。ゲストティーチャーとのコミュニケーションや子どもたち同士が互いに探究していく姿勢が魅力的でした。このような学びから、住田町に誇りをもって、何歳になっても、どこに住んでいたとしても、心に残ってほしいと思います。

(6) 教育研究所を母体とした「地域創造学」を柱とする教育課程推進に向けた体制づくりに向けて

① 教育研究所各部会での取組

今年度は3つの部会において、各小・中学校長や副校長が部長を務め、部会の運営に当たった。

[学校カリキュラム検討部会]

1 研究の目的

地域創造学及び各教科・領域等において「社会的実践力」を育むために、「地域創造学」を据えた教育課程の編成の在り方を検討する。

2 研究の内容

(1) 地域創造学で育成したい資質・能力と各教科・領域との関連を明らかにした上で教育課程を編成し、次年度の教育課程及び学校運営計画書を作成する。

(2) 同校種間・異校種間でのよりよい連携のあり方等について検討する。

(3) 「教科・領域との関連検討表」の見直しを行う。

(4) 地域創造学の教科書(試案)の作成、改善及び実践の検討を行う。

(5) 令和7年度版年間指導計画の作成を行う。

① ステージ内及びステージ間での学習内容の系統性や反復性、学習方法の積み上げに留意した計画になるよう改善を図る。

② 校種間での連携を意識した計画になるよう改善を図る。

③ 児童生徒の主体的な思考を促し、地域のひと・もの・ことの活用や連携をより促進した計画になるよう改善を図る。

3 研究の推進

第1回 4月25日(木)

組織づくり・ねらいの確認・今後の研究推進の方向性の確認

第2回 6月12日(火)

地域創造学の教科書の内容確認・改善案・分担等

第3回 7月29日(月)

地域創造学の教科書の改善案

第4回 9月4日(水)

学校公開研究会「ステージ間(校種間)連携分科会」発表内容の確認

今年度の同校種間・異校種間連携の実態についての交流

第5回 1月9日(木)

年間指導計画の見直しと令和7年度版作成について

研究の振り返りについて

4 研究の実際

(1) 地域創造学教科書作成について

①目的

- ・児童生徒が主体的に探究活動を行っていくための学びのガイドブックとする。
- ・教職員の持続可能な取組につなげていくため。

②修正点

ア 表記の工夫

- ・囲み枠の色に意味づけをし、学びのガイドやヒントとする。
- ・大単元名（単元を貫く大きな問い）は緑色、課題・活動は青色、探究の6つのプロセスは緑色、評価とまとめは赤色で囲むことを統一。

イ 発達段階に応じた文章表現

- ・1年生の教科書には、探究のプロセスを明記する。
- ・3・4年生の教科書は、2年生から3年生に進級した児童が理解できる平易な表記とする。
- ・教科書の吹き出しは、見方・考え方を働かせるためのヒントとなる文言とし、「学びのコンパス」の「学びのポイント」と同一にする。

（2）年間指導計画の修正等について

①校種間、ステージ間連携について

- ・令和7年度に向けて、コロナ禍で実施できなかった連携活動を見直し、再開する活動について検討し組み込んでいく。
- ・年間指導計画の中にも項を起し明記することで、授業者が見通しを持ちやすくする。

②個人探究活動との関わりについて

- ・ステージ3及び4を指導する際は、指導計画はあくまでも目安、指針として活用する。「すみた 学びのコンパス」を活用しながら生徒の求める探究活動に応じて柔軟に対応していく。

5 成果と課題

（1）成果

①地域創造学教科書作成について

- ・主に、小学校1年生と3・4年生の教科書について、修正を図ることができた。探究のプロセスを挿入し、吹き出しの言葉を吟味するなど、内容を整理・改善することで、児童の学びを支えるものとすることができた。

②校種間、ステージ間連携について

- ・部会において、今年度の連携の実態やコロナ前に行っていた活動について交流し確認することができた。それらを踏まえ、現在作成中の年間指導計画に生かしていききたい。

（2）課題

①年間指導計画の修正について

- ・今後も授業実践を通して、単元指導計画の改善・見直しを行っていく。また、小学校の複式学級の増加に伴い、今後の連携の在り方について検討していく。

②教科書の改善について

- ・教科書に基づく実践及び教科書の改善（実践事例の掲載等）について検討していく。

6 今後の研究推進にあたって

- （1）今後も今までの成果・改善点をしっかりと確認しながら、教育課程の編成や計画的な実施について、さらに情報交流を深め、検討していく。

- （2）小学校の複式学級増に伴い、カリキュラム検討を継続していくこと。

- （3）住田高等学校は令和7年度に向けた方向性として、科目が「地域創造学」から「総合的な探究の時間」となり、1年生は1単位、2年生は2単位、3年生は1単位となる。これまで水曜日7校時に実施していたが、金曜日6校時（2年は5・6校時）に実施する予

定。令和8年度は1年生1単位、2年生2単位、3年生2単位とする予定。この8年間の地域創造学の取組を土台にして、生徒にとって有益な探究活動をするための指導方法を構築していく。校外での活動をさらに強化するとともに、オンラインなども活用しながら全国の高校生や専門家の方々とはつながりを持ち、多くのフィードバックを得ることで、より信頼性の高い探究を目指す。

[学習指導・評価検証部会]

1 研究の目的

地域創造学年間指導計画に基づいた授業実践や評価の在り方（パフォーマンス評価、ポートフォリオ評価等）について検討し、児童生徒の実態に応じて、他部会や地域と連携しながら、計画の見直しや指導の改善を図る。

2 研究の内容

- (1) 社会的実践力の育成を目指した授業実践
- (2) 探究的な学習活動を推進する指導と評価の在り方
- (3) 学校公開に向けて学習指導案の検討

3 研究の推進

第1回 4月25日（木）

組織・研究開発の再確認、今年度の方向性

第2回 5月28日（火）

各校の実践交流

第3回 6月28日（金）

各校の実践交流

～ 各校研究実践、まとめ ～

4 研究の実際

研究開発の方向性を再確認し、各校の授業実践とその交流を中心に研究協議を進めた。

(1) 学習指導について

①児童生徒自身がプロジェクトを実現する過程において、探究の6つのプロセスを意識しながら、自分の学びをデザインし、自身の変容を振り返ることが出来るよう「名人カード」や「学びのコンパス」を活用した授業展開の在り方を検証した。各ステージにおいて課題の追究のチェックポイントを設け、学習状況に応じて対応した。子どもたちが試行錯誤しながらも自分に向き合い、自分の学びを自己調整しながらさらに推進できるように取り組んだ。学習課題に応じて多様な学習活動が展開される自由度の高い探究的な学習のあり方等について検討した。

②児童生徒の主体的な思考を促す指導者の適切な支援・伴走者としての在り方を探った。子どもたちが自身の学びをデザインし、主体的に課題と向き合い、見通しをもって探究活動が進むよう、どのように声をかけ、寄り添い、援助したら良いか、主体的な学びをサポートするためのよき伴走者とはどうあるべきか意見交流を深めた。また、各学校で校内研究会を進めた。

③各ステージ及びステージ間での学習内容の系統性や反復性、学習方法の積み上げに留

意した授業改善を図った。単元計画表に基づいた学習の課題と自由度の高い探究的な学習について、調査中心の学習から発信、提案、実践へと、協働的な学びと個別最適な学びのバランスを図りながら、主体的に学び続けるための授業の在り方を実践した。

(2) 評価について

- ①育てたい資質・能力を踏まえ、児童生徒の学びの過程を蓄積するポートフォリオやワークシート等の活用方法を検証した。小、中、高へと学びを有効につなぐ手段のひとつとして活用することで、子どもたち自身が自らの学びを振り返り、自己評価を行うとともに、自己肯定感を高め、次の学びへ目標をもって向かえるよう実践を行った。また、教師側は一人一人の児童生徒の過程やプロセスを見取ることができ、多面的に評価をすることができた。
- ②子どもたち一人一人に対応し、自身の「ふり返し」や「メタ認知」の効果的な自己評価・自己診断できるようロイロノートを活用し、学びの蓄積を図ることができた。
- ③学習目標の達成度合いを判断するため、「名人カード」や「学びのコンパス」を活用することで、継続的な指導と評価の一体化を図ることができた。子どもたちが探究活動を進めるにあたり、理由・根拠をもって自分の考えを提案、発信、実践するとともに、教師側の見取りとして有効的な方法を検証した。

(3) 学習指導案について

新しい指導案の様式、書き方について共通理解を図った。

- ①教材観、児童（生徒）観、指導観を関連させた上で、「名人カード」や「学びのコンパス」、「伴走者」の役割をどのようにリンクさせるか。
- ②児童（生徒）観では、客観的データや調査結果を活用するとより効果的である。
- ③単元計画は、指導者の視点で大単元について書くこととする。

5 成果と課題

(1) 成果

- ①研究開発の視点で、各校の実践をもとにした積極的な意見交換を図ることができた。地域創造学のねらいや学習指導要領解説との関連をふまえ、学習評価の基本的な考え方や留意すべき点、理由・根拠を明確にした提案・発信の重要性、学習課題に応じて多様な学習活動が展開される自由度の高い探究的な学習の在り方等について、各校の実践をもとにした意見交流を図ることができた。
- ②年間指導計画を見通し、各校で授業実践を行い、児童生徒がより探究的な学習活動を行うことができるよう単元計画を見直し、授業実践の改善を図ることができた。
- ③育成を目指す資質・能力が育成されているかどうか、指導と評価の在り方について検証することができた。各小・中・高の現状及び各ステージにおける在り方について、授業実践、校内研究会を通して、指導と評価の一体化を推進することができた。
- ④町統一の新しい学習指導案の様式について、共通理解を図ることができた。
- ⑤各校で「名人カード」や「学びのコンパス」を作成し、児童生徒が主体的な学習を進めたり、自己評価をしたりすることに役立てることができた。
- ⑥児童生徒の振り返りについて、記述やロイロノート等を活用することで、課題解決の過程や児童生徒の変容を見取り、次時の学習への手立てを見だし、学習を援助することができた。

(2) 課題

- ①単元計画、社会的実践力の系統表の修正・改善（小学校段階）
- ②個別最適な学び、自由進捗学習の修正・改善（中学校段階）

- (1) 第10次住田町教育振興基本計画に基づく実践
- (2) 教育課程特例校指定における持続可能な取組方策
- (3) 学習指導と評価の見直し・改善の在り方
- (4) 小・中・高の連携とステージ間の滑らかな接続の在り方

子供たち自身が自らの学びを振り返って次の学びに向かうことができるようにするために、学びのコンパスをもとに自己評価を行った。低学年はより「学びのコンパス」に近い形

のワークシートを作成し、振り返ることで、子供たちが自分の学びについて振り返り、次へのめあてをもつことにつながった。教師側も、一人一人の自己評価や振り返りの内容を確認しながら、伴走者としての声掛けや発問の工夫、資料の提示の仕方の工夫などを行うことができた。

3 来年度に向けての方向性

- ・自分たちで学びを計画し、進めていくための「学びのコンパス」のさらなる修正が必要と考える。
- ・すぐに振り返りを確認できるよう、ロイロノートを使用しての振り返りも検討していきたい。

[学習指導・評価検証部会（有住小学校）]

1 学習指導について（学びのコンパスの活用）

- ・各学年、単元や小單元ごとに作成した。
- ・第2ステージの教科書に学びのコンパスを載せた。
- ・毎時間授業の導入や終末で活用した。

○子どもたちが学習のゴールを明確にし、主体的に学習に取り組むことができた。

○自己調整を図りながら学習を進めていくことにつながった。

△単元ごとの作成だと一度に見渡せて子どもたちにとってよいが、学びのポイントや望ましい姿をすべて入れ込むことが難しかった。

～単元終末での子どもたちの振り返り～（一部抜粋）

- ・思いや願いに注目してゲストティーチャーさんから上手に情報収集することができた。
- ・自分たちが多くの人に発信するためにいろんな方法を考えて実行することができた。
- ・まだわからないことをどうすればわかるようになるか考えながら学習することができた。

2 評価について

- ・学びのコンパスを確認しながらロイロノートに毎時間振り返りを書き溜めた。
（視点 活動の仕方 わかったこと考えたこと 次したいこと）
- ・低学年や中学年は日付やマークのみロイロ、他はワークシートに書き溜めた。

○学びの自覚化や自らの学びの姿の確認ができた。

○交流し次時の自分の探究活動をよりよいものにする姿が見られた。

○授業者は指導や評価のポイント、方向性をしっかりもったうえで単元の指導にあたることができ、また、日々の学習状況を踏まえた次時の授業構想を考えることができたためよかった。

3 来年度に向けての方向性

- ・学びのコンパスは概ね高評価だったため来年も継続したい。
- ・作成したものを学校間で共有できればよい。そのため、単元ごとの作成か小單元ごとの作

成にするのか検討が必要。また、小学校の先生たちが集まり作成する機会があればよいと考える。

- ・12の資質・能力の評価の在り方をどうするのか検討が必要だと考える。自分たちで学びを計画し、進めていくための「学びのコンパス」のさらなる修正が必要と考える。

〔学習指導・評価検証部会（住田中学校）〕

1 学習指導について（学びのコンパスの活用）

（1）「学びのコンパス」活用の目的

- ・学習を自分でコントロールするための指標にする
- ・今後の活動に見通しをもつ
- ・各段階でどのように学びに取り組んだらよいのかのポイントを確認する

（2）活用の仕方

- ・全生徒に配布し、個人・グループで各プロセスに取り組む時間の計画を立てさせる
- ・教室に掲示するとともに、名前のマグネットを移動させながら、自分が今どの段階にあるのかを毎時間確認する。（プロセス間を往還することもある）
- ・今後の活動に見通しをもたせ、自己調整させる
- ・プロセスの間にチェックポイントを設け、教師との対話の中で、次のプロセスに進むか、いったん戻るかなどを検討する

（3）生徒の変容

プロセスの進捗状況を可視化することで、見通しをもち、自己調整しながら探究活動をする姿が見られた。また、各プロセスで学びのポイントや、まとめ（報告会）のルーブリックを確認することにより、活動を進めるための拠り所とすることができた。

2 評価について

《振り返りの項目》

（1）学習の振り返り

その日の活動の最後に振り返りの時間を設け、ロイロノートで振り返りを行った。（個人）

- 1 今日の探究のプロセス
- 2 今日の活動内容
- 3 次の時間の予定

（2）学びの自己評価・自己診断の工夫

Formsによる自己評価を2学期末に行い、自己の活動の振り返りを行った。（学年ごとに質問項目は異なる。1つの項目について4段階評価をするとともに、そう考える理由を記述させる。）その後、生徒の自己評価と教師の見取りも併せて、記述による評価を行った。（活動した内容、身についた資質・能力について）

（3）指導と評価の一体化について

「学びのコンパス」に、まとめ（報告会）のルーブリックを記載している。A段階、B段階のルーブリックを載せ、報告会に至るまでに指導をしている。当日の報告会の振り返りをする際に、個人で自己評価をさせた。その自己評価と教師側の見取りを併せ、評価を行った。

3 来年度に向けての方向性

地域創造学については今年度行ったことを継続させ、その中で今年課題として見えてきたものについて改善していく方向である。例を挙げると、生徒の相互交流を行うためのスキルを他教科の中でも鍛えることがひとつの課題である。同時に、地域創造学を他教科の指導と切り離して考えるのではなく、教育活動全体の中で、育てたい資質・能力を鍛え

ていくことが重要だということがこれまでの実践や校内研究会の中でも浮き彫りになってきた。一方、各教科での学力向上についても喫緊の課題ととらえている。地域創造学で育成を目指している資質・能力と、それを支える学力の育成により一層注力していきたい。

[学習指導・評価検証部会（住田高等学校）]

1 学習指導について

年度最初の授業は「地域創造学」についてのガイダンスを実施し、1年間の流れや実施内容などとともに、「探究のプロセスの6つの要素」及び「社会的実践力を構成する12の資質・能力」の説明を行っている。

第4ステージ【1年生】では「自分を知り、地域を知る」をテーマに、第5ステージの探究活動において必要な資質・能力を養うための活動を学年全体で実施し、第5ステージ【2年生】では「自分と向き合い、地域に触れる」、【3年生】では「自分の成長を認め、社会とのつながりを考える」をテーマに、自分の内面にある興味・関心や得意分野等から地域貢献につなげていく生徒個々が設定したマイプロジェクトを進めている。

2 評価について

(1) 指導と評価の一体化

学習指導案に身に付けたい「社会的実践力を構成する12の資質・能力」とその「評価材料」を記載し、支援や伴走に生かしている。ただし、評価を意識しすぎるあまりに教員が先導しすぎることが無いように心掛けている。

(例) B1☆見通す力（計画シート） B2☆多面的・多角的に考える力（観察）
D2☆調整する力（ワークシート）

(2) 学びの自己評価・自己診断の工夫

1年生は自己評価シートを活用し、授業の目標を確認の上、自己評価、評価の理由、大事だと思ったことを記入し、1学年団とコーディネーターでフィードバックを行っている。各単元が終了した時点で、身に付いた資質・能力を確認している。

2・3年生は探究タスクシートを活用し、やるべきことの確認、準備物、今後の予定、困っていることなどを記入し、各学年団とコーディネーターでフィードバックを行っている。評価も含め、自分の現時点での位置の確認を重視している。

最終授業での年間振り返りにおいて、1年間及び2・3年生は1年生からの成長点なども含め振り返り、内容をグループで共有している。振り返りワークシートのコピーを通知表とともに同封し、保護者にも確認いただいている。

(3) ロイロノート等を活用しての振り返り

1月15日の第4ステージ（1年生）成果発表及び第5ステージ（2年生）プロジェクト中間発表において、Formsを活用した振り返りを初めて実施した。内容は、身に付けたい「社会的実践力を構成する12の資質・能力」と関連させ、発表における視点と聴衆の視点、発表会全体の感想の3つの視点からのアンケートとした。

3 来年度に向けての方向性

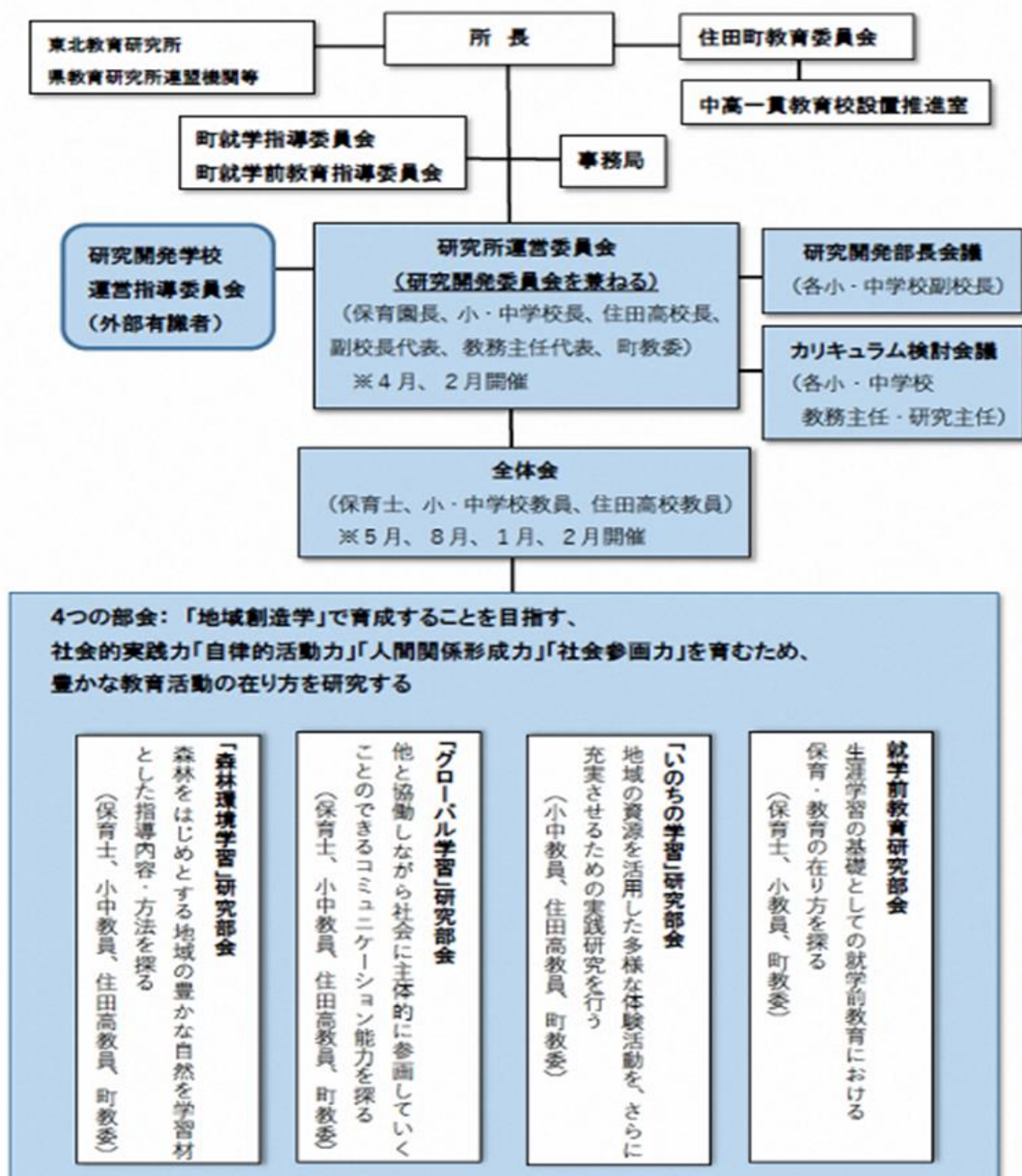
来年度から高校単独での「総合的な探究の時間」となる。この8年間の地域創造学を土台に、生徒にとって有益な探究活動にするための指導法を構築していく必要がある。その

ため、校外での活動をさらに強化するとともに、オンラインなども活用しながら全国の高校生や専門家の方々とつながり、多くのフィードバックを得ることで、より信頼性の高い探究を目指していく。今後も町教育委員会や町内保育園、小・中学校との連携を図っていく。

② 教育研究所の組織について

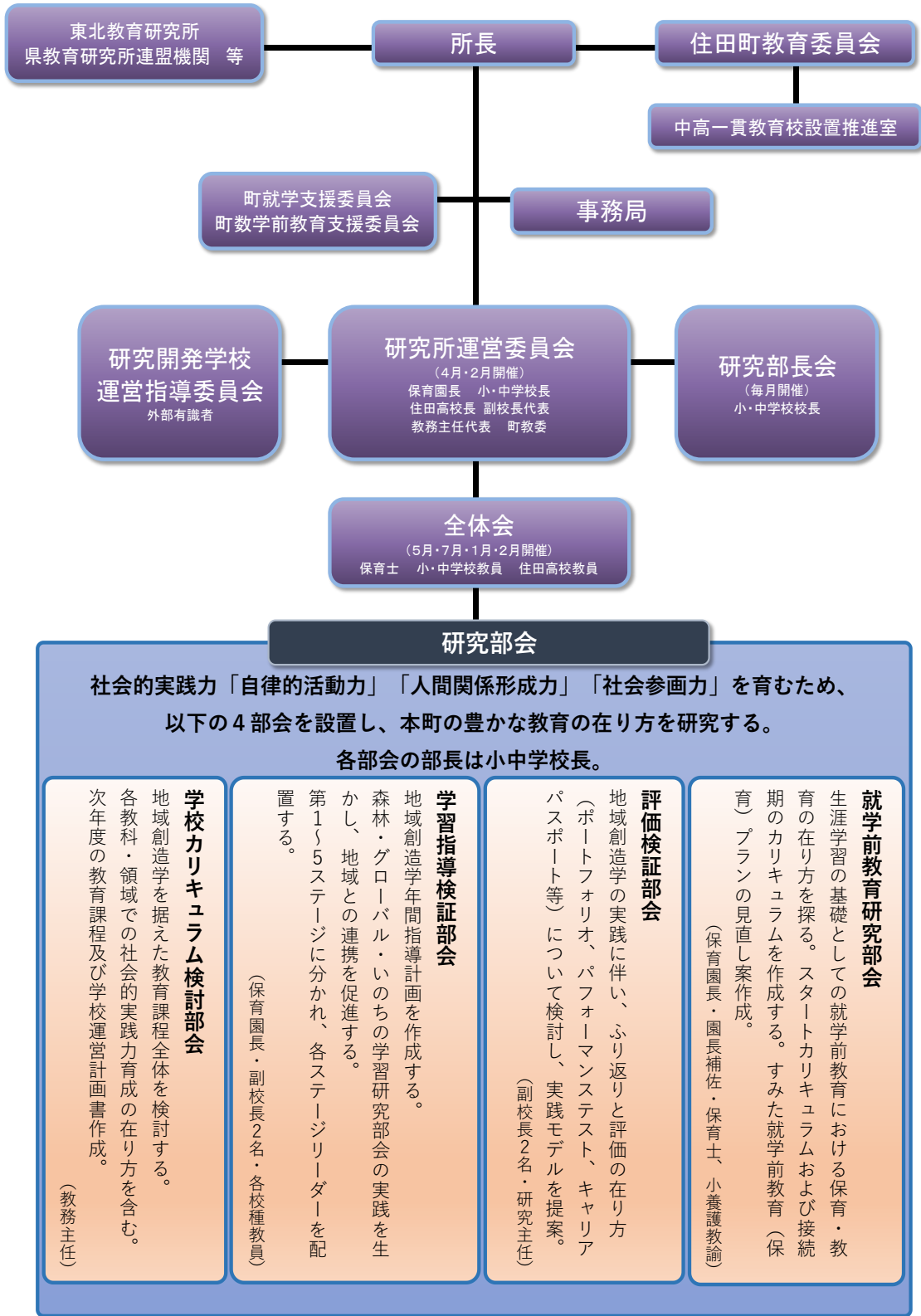
研究開発学校指定１年次（平成２９年度）、各部会での取組をととして異校種の教員が交流し互いの実践について相互理解を図ることと、各学校の校内研究において、目指す資質・能力の検討と実際の教育課程実施に向けての準備を行うことを通じ、町の教育研究所体制について改編の必要性が議論されるようになった【表３－１０】。

【表 3-10】平成 29 年度研究所組織図



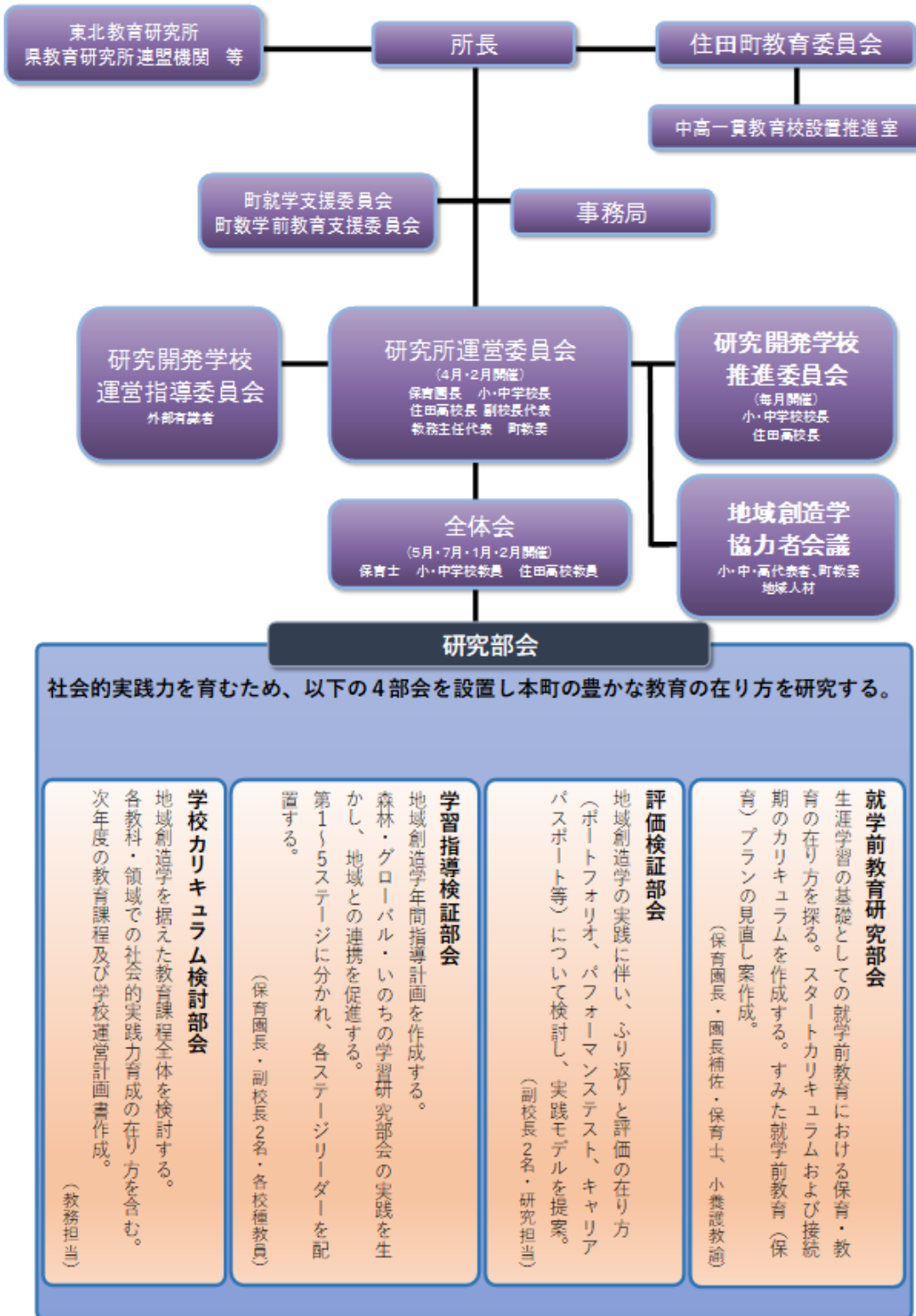
研究開発学校指定2年次（平成30年度）から地域創造学を据えた教育課程を実施しながら、その成果や課題を継続的に検証していくために、研究所の組織を大幅に改編し取り組んでいくこととした【表3-11】。

【表3-11】平成30年度研究所組織図



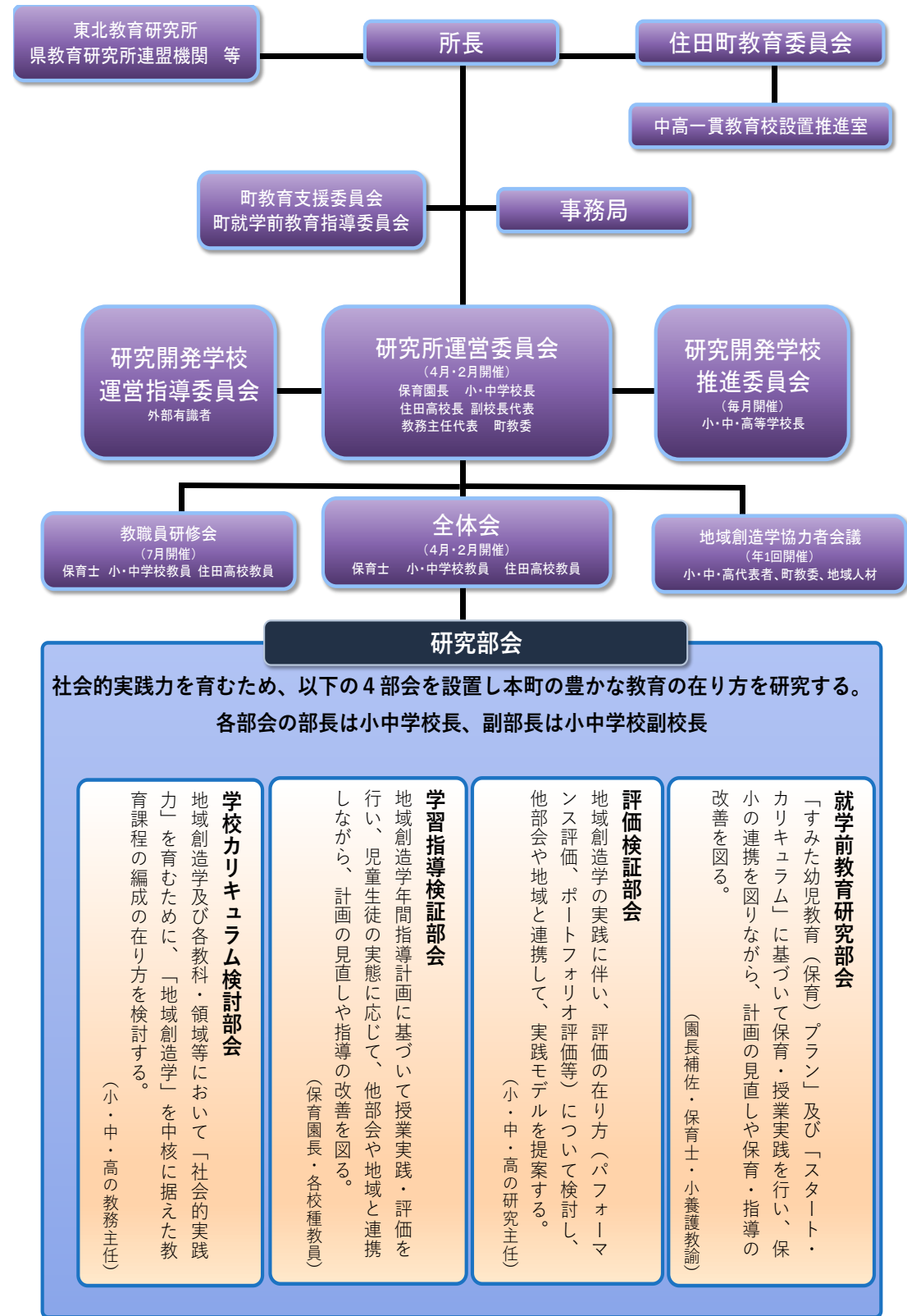
研究開発学校指定3年次（令和元年度）は各校の代表者、町教育委員会と、地域創造学の学びに協力をいただく地域の方々とで、地域創造学の構想や学習予定、協力を要請したいこと、地域の方からの助言や意見等を直接お聞きし協議する場として、新規に地域創造学協力者会議を開催した【表3-12】。

【表3-12】令和元年度研究所組織図



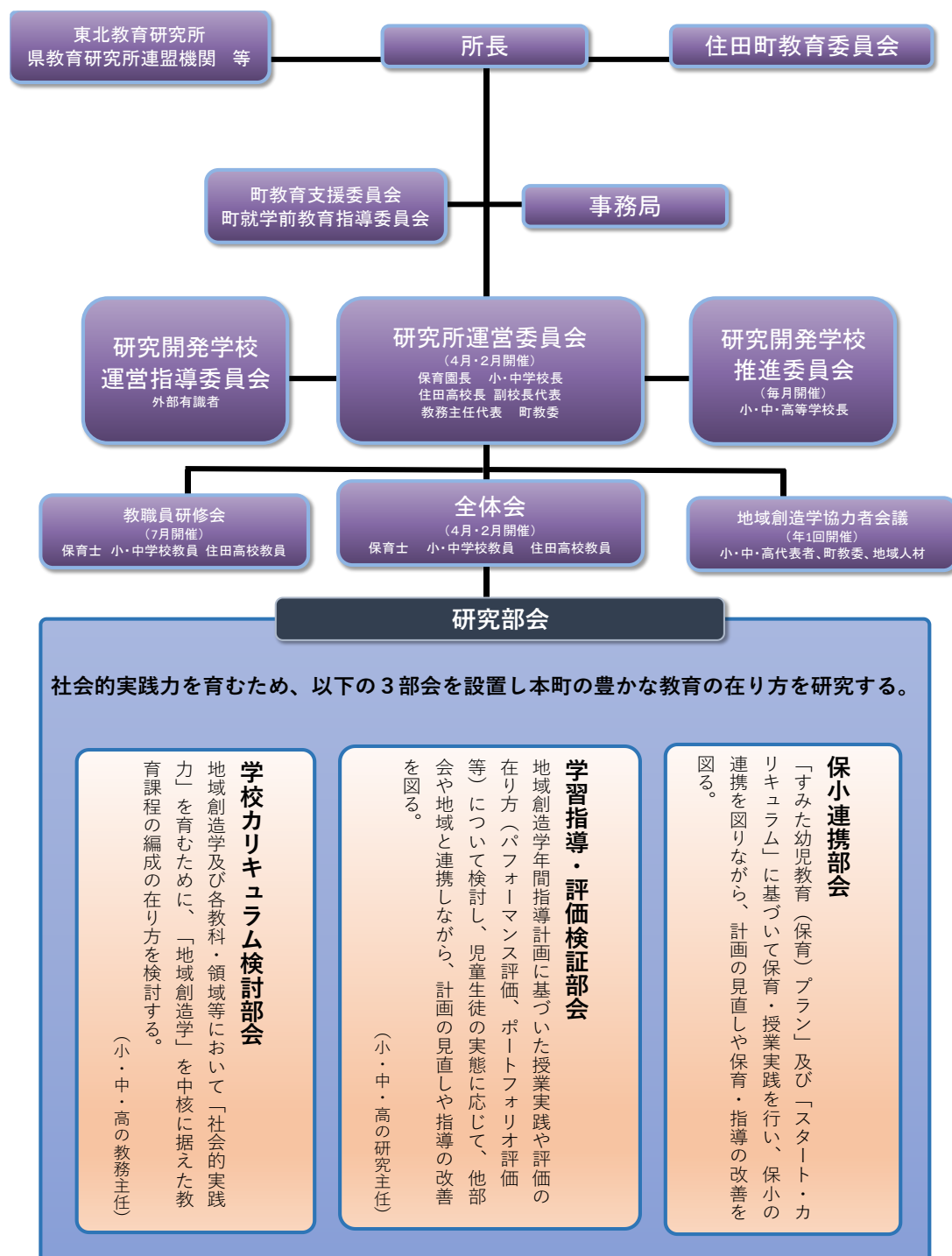
研究開発学校指定4年次（令和2年度）からは、1月と2月に行っていた全体会の内容を集約して2月に1回行い、夏休みに行っていた全体会は、地域資源を教員が学ぶための「教職員研修会」に名称を変更することとした。【表3-13】。

【表3-13】令和2～5年度研究所組織図



研究開発学校指定延長3年次（令和6年度）は、指導と評価の一体化等の更なる推進を図るため、研究所の研究部会において学習指導検証部会と評価検証部会を改編し、これまでの4部会から3部会の構成とした。【表3-14】。

【表3-14】令和6年度研究所組織図



③ 研究開発学校推進委員会と運営指導委員会の開催について

毎月、小・中・高等学校4校の校長が参加する研究開発学校推進委員会を開催し、研究開発についての検討、協議を行ってきた。

さらに、9名の外部有識者による運営指導委員会を組織し、研究について専門的見地から直接ご指導をいただいた。

【運営指導委員会】

組織

氏 名	所 属	職 名	備考（専門分野等）
田代 高章	岩手大学教育学部	教 授	教育方法学
山本 奨	岩手大学教育学部	教 授	学校臨床心理学
後藤 顕一	東洋大学食環境科学部	教 授	教育課程
毛内 嘉威	秋田公立美術大学	副学長	道德教育、教育課程
河野 麻沙美	上越教育大学大学院学校教育研究科	准教授	教育方法学
福嶋 祐貴	京都教育大学大学院連合教職実践研究科	准教授	教育方法学
七木田 俊	岩手県教育委員会学校教育室	主任指導主事	
畠山 美穂	岩手県教育委員会学校教育室	主任指導主事	
馬場 志保	岩手県教育委員会沿岸南部教育事務所	主任指導主事	

開催記録

	開催期日 場所	内 容
第1回	令和6年6月19日 住田町役場 住田町立有住小学校	【指導助言者】 岩手大学教育学部 教 授 山本 奨 上越教育大学大学院学校教育研究科 准教授 河野 麻沙美 京都教育大学大学院連合教職実践研究科 准教授 福嶋 祐貴 岩手県教育委員会学校教育室 主任指導主事 七木田 俊 岩手県教育委員会学校教育室 主任指導主事 畠山 美穂 岩手県教育委員会沿岸南部教育事務所 主任指導主事 馬場 志保 ・研究の方向性や計画等についての指導助言 ・令和6年度6月までの研究状況について
第2回	令和6年11月26日 住田町役場	【指導助言者】 岩手大学教育学部 教 授 山本 奨 秋田公立美術大学 副学長 毛内 嘉威 上越教育大学大学院学校教育研究科 准教授 河野 麻沙美 京都教育大学大学院連合教職実践研究科 准教授 福嶋 祐貴 岩手県教育委員会学校教育室 主任指導主事 七木田 俊 ・研究の方向性や計画等についての指導助言 ・令和6年度12月までの研究状況について
第3回	令和7年2月10日 住田町役場	【指導助言者】 岩手大学教育学部 教 授 田代 高章 岩手大学教育学部 教 授 山本 奨 秋田公立美術大学 副学長 毛内 嘉威 京都教育大学大学院連合教職実践研究科 准教授 福嶋 祐貴 岩手県教育委員会学校教育室 主任指導主事 七木田 俊 岩手県教育委員会学校教育室 主任指導主事 畠山 美穂 岩手県教育委員会沿岸南部教育事務所 主任指導主事 馬場 志保

		・研究のまとめに対する評価と次年度計画についての指導助言
--	--	------------------------------

④ 教育研究所全体会、教育研究所教職員研修会の開催について

本町の教育研究所では、町内小・中学校及び県立高等学校の教員、町内保育園の保育士を研究員として委嘱し、年2回の全体会、教職員研修会の開催を通じて各校の取組の共有を図っている。

【今年度の研究所全体会の開催】

	開催日	出席人数 小中高教員 保育士	会場	内容
第1回	4/25	48人	住田町役場町民ホール	・今年度計画確認、部会開催
第2回	2/19	46人	住田町役場町民ホール	・部会発表（今年度の成果と課題） ・研究推進に係る協議

【今年度の教職員研修会の開催】

開催日	出席人数 小中高教員 保育士	会場	内容
7/31	42人	町内各施設等	・学校公開研究会に関わる協議（各部会・指導案検討会等）

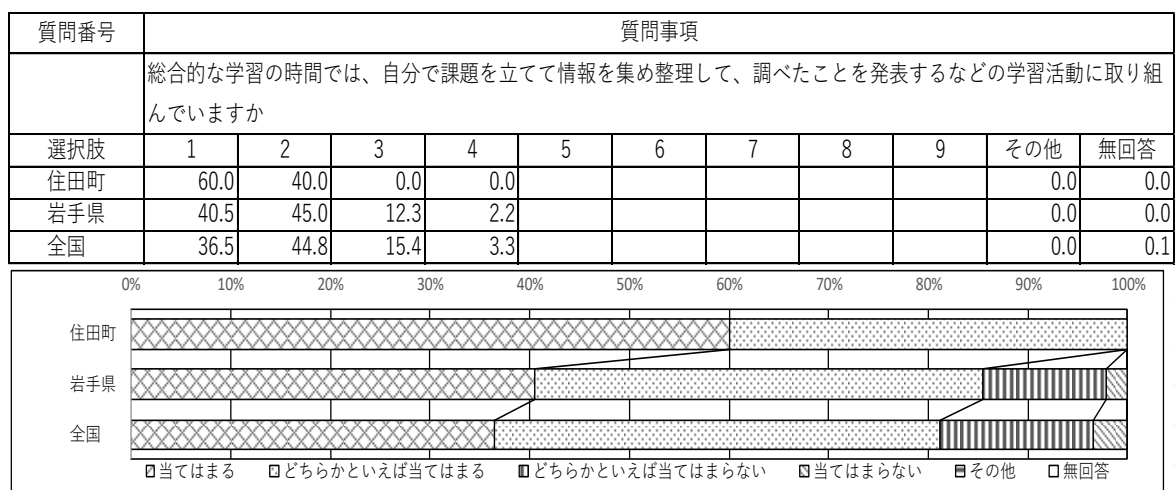
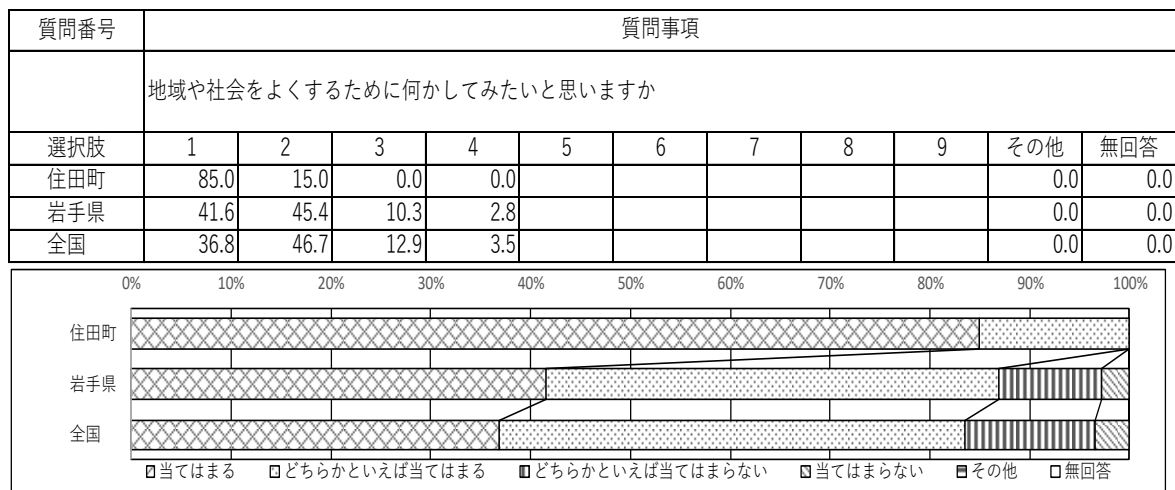
4 研究開発の結果

（１）児童生徒への効果

社会的実践力の系統表や単元計画、学習指導要領解説に基づいた地域創造学の本格的な授業実践から3年が経過した令和3年度末、12の資質・能力や単元計画の見直しを図った。それらを受けて修正を図った社会的実践力の系統表や改訂した単元計画に基づいて「地域創造学」を実施し、引き続き地域を題材とする学びが展開された。

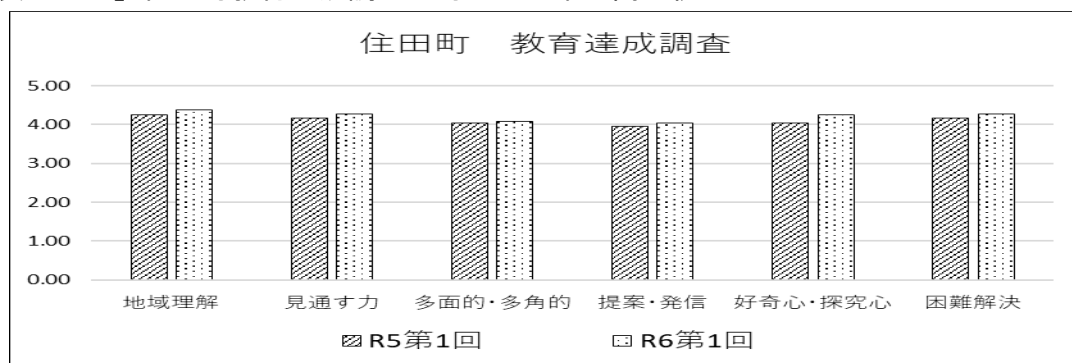
令和6年度全国学力・学習状況調査の児童質問紙調査（小学校6年生）の「地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか」の質問に肯定回答する児童の割合は100%であり、県の肯定回答の割合よりも13.0ポイント、全国の肯定回答の割合よりも16.5ポイント高かった。また、「総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか」の質問（本町では地域創造学の学習と置き換えて回答）に肯定回答する児童の割合は100%であり、県の肯定回答の割合よりも14.5ポイント、全国の肯定回答の割合よりも18.7ポイント高かった【表4-1】。児童生徒にとって身近な地域資源を題材に、主体的に課題設定や情報収集などの探究のプロセスを踏んでいくことで、地域のよさについて体感的に理解を深め、地域の魅力をどのように発信すればいいのか模索する児童生徒、地域課題を自分事としてとらえ、これまでに培った知識や地域の方のアドバイスを活用して解決を図ろうとする児童生徒などが見られ、社会的実践力に関わる様々な成長の表れであると捉えられる。今後も、地域創造学の効果的な単元構成や指導方法、評価の在り方を模索するとともに、児童生徒の変容を、教師が見とり、価値づけ、適切に支援していくことが求められる。

【表４－１】令和６年度全国学力・学習状況調査 児童質問紙



地域創造学を通して児童生徒の学習への達成感等がどのように変容したのかをとらえるために育成を目指す12の資質・能力に合わせて作成した12の質問項目で行う教育達成調査を令和元年度から住田町内の小・中・高の児童生徒を対象に実施している。昨年度と今年度の調査において住田町の小・中・高の児童生徒の平均値を見ると、「地域理解」や社会参画に関する資質・能力である「見通す力」、「困難を解決しようとする心」などが引き続き高い値を示している。地域に対する価値の発見や課題を解決するために必要な能力に関する部分に関して、地域をフィールドに探究活動を展開する「地域創造学」を中核とした教育課程を継続して実施している事による効果が、安定して表れていると捉えている。

【表４－２】住田町教育達成調査 町内小・中・高4校



※教育達成調査の質問項目

- ・「地域理解」・・・「地域に関する学習は、自分に役立っていて、「地域は大切だ」と思うようになり、地域が好きになった。」
- ・「見通す力」・・・「自分たちの地域には、どのようなよさや問題があるのかを見つけて、問題の解決のために見通すことができる。」
- ・「多面的・多角的に考える力」・・・「地域のことについて正しい情報をもとに、自分の考えがふさわしいかどうかを、その理由も明らかにしながら考える」
- ・「提案・発信する力」・・・「地域のためになることをあれこれ考えたり、生み出したりして提案や発信ができる。」
- ・「好奇心・探究心」・・・「地域のことについてもっと知りたい、調べたいと思うことがたくさんある。」
- ・「困難を解決しようする心」・・・「思った通りに進まないことがあっても、あきらめしないでやりとげようとする。」

【教育達成調査シート（一部抜粋）】

◆次のア～シの項目について、現在のあなたは、どの程度当てはまりますか。
当てはまると思った数字一つに○をつけてください。このアンケートは、学習の成績には関係ありません。

	質 問 内 容	当てはま まったく らない	1	2	3	4	5	当てはま る	よ く 当てはま る	
ア	地域に関する学習は、自分に役立っていて、「地域は大切だ」と思うようになり、地域が好きになった。	1	-	2	-	3	-	4	-	5
イ	自分たちの地域には、どのようなよさや問題があるのかを見つけて、問題の解決のために見通すことができる。	1	-	2	-	3	-	4	-	5
ウ	地域のことについて正しい情報をもとに、自分の考えがふさわしいかどうかを、その理由も明らかにしながら考える。	1	-	2	-	3	-	4	-	5

（２）教師への効果について

本年度も令和３年度に改訂した社会的実践力の系統表や単元計画に基づいて、授業実践と振り返りを進めてきたが、授業実践を進めていく過程においては、児童生徒の実態に基づき、指導計画を随時更新しながら実践している例が見られる。このことは、児童生徒に社会的実践力を育成していくために、どのような指導内容や指導方法が適切であるのかを模索する意欲の表れであるとも捉えられる。

また、児童生徒の学習状況を把握し、児童生徒に寄り添いながら、一緒に考えたり、視野を広げてあげたりしながら、共に走っていく伴走者として、教師が児童生徒の主体的な学びをサポートしてきた。さらに授業研究会の相互交流を通して、「他校種の先生方がどのような点に留意して指導しているのかを改めて確認することができた。今後も、校種間連携を継続していく必要性を感じた」という声が異校種の教員から聞かれた。地域創造学に係る教職員アンケートにおいても「学校内だけでは解決できない課題について、地域の方々や関係機関、異校種間との連携が深まっていると感じる」等の回答も見られた。授業研究会の相互交流や各部会での協議等において、社会的実践力の系統表に基づいてどのような力をどこまで育成して次のステージへつなげていくべきなのかなど、校種を越えた１２年間の学びという視点で指導や評価の在り方について絶えず検討・見直しが行われている。

（３）保護者等への効果について

小・中・高の保護者等に向けてアンケートを実施した。内容は、「地域創造学は児童生徒の成長にとって有意義だと思うか？」という項目に関して四段階評価で回答するものの他に、「有意義である（ない）と思う理由」や、「地域創造学に期待したいこと」を自由記述で回答するものを設定した。「地域創造学は児童生徒の成長にとって有意義だと思うか？」という項目に関して、肯定的な回答の割合が高かった。その理由としては、「地域を知ること、更なる好奇心が掻き立てられ、地域への愛着が湧くと思うから」などの回答が得られた。「地域創造学に期待したいこと」の項目における記述内容としては、「子供たちを通して親も地域のことを知っていく、とても大切な授業だと思うので、今後も継続してほしい」などの回答が得られた。今後の地域創造学の学びをより充実したものにしていくための材料とするためにも、保護者や地域の声を多面的・多角的に分析しながら、地域全体の共通理解を図るための手立て等をさらに工夫していく必要がある。

また、地域の報道機関（町営ケーブルテレビ、新聞）とも連携し、子どもたちが取り組んだプロジェクト発表会の様子や異年齢による交流活動の様子が紹介されるなど、児童生徒の学びの姿を頻繁に情報発信することで、保護者を含む地域の方々の理解が深まってきている。本町のような小規模中山間地域ならではの貴重なツールでもあることから、引き続き連携を図っていきたい。

５ 今後の方向性について

（１）カリキュラムの不断の見直しについて

これまでに目指す資質・能力や系統的な指導方法及び評価方法、地域の実態に即した単元計画等を開発・実践してきたが、これらのカリキュラムに関しては、常に見直しを図っていく。年間指導計画の内容が社会的実践力を系統的に育成していくものになっているか、共通単元を実施する際の学校間の協働学習等の在り方等、社会的実践力の系統表や単元計画等を含むこれまでに開発してきたカリキュラム全体に関して、児童生徒や地域、保護者、教職員の実態等を踏まえつつ、他地域の先進事例等に学びながら、常によりよい方法を追究していくことが求められる。これまでの取組や児童生徒の変容等を振り返りながら分析していく評価機会を町教育研究所全体会や各研究部会において設定し、「12年間で児童生徒の社会的実践力を系統的に育成していく学び」であるという視点を大切にしたい見直しを進めていく。

（２）評価の在り方について

地域創造学は12年間の学びであるということを意識しながら、学年や校種を超えて児童生徒に社会的実践力に関わるどのような変容があったのかについて、長期的に評価していくことが求められる。地域創造学では「探究の六つのプロセス」を大切にしており、生徒が自身のプロジェクトを実現する過程で、どのようなプロセスの中で、どのようなことに困難さを抱き、どのように乗り越え、社会的実践力に関わる変容や実践に最終的に結びついていったのか、そして教師はそれぞれのプロセスでどのような指導・支援を大切にすることが社会的実践力を育成していく上で効果的だったのかということに関して検証していく。

（３）社会的実践力を育成するための「地域創造学」教科書の実施・改善

地域創造学において、児童生徒が主体的に探究活動を行っていくために試案として作成した教科書の記載内容や活用の在り方の更なる改善を図るために検証を継続していく。「探究の六つのプロセス」を大切にしたい探究の進め方、これまでの生徒のプロジェクト活動等の実践例の記載、地域の先輩の実践事例を児童生徒が自身の学習過程の中で適宜参照し、新たな

探究課題を見出しながら自身の探究活動を進めていくこと等、学習者の自己決定的活動を促し、自立的に学び方を学ぶ力の育成に資する視点を大切にしながら、実践結果について検証していく。

（４）持続可能なプログラムの構築について

町内の小・中・高が一体となって新設教科を据えた教育課程の在り方を探るために、町単予算により配置した指導主事がコーディネーターとなり、地域社会や児童生徒の実態に応じた資質・能力及び系統表の独自設定や小・中・高の教員が共通理解しながら作成した12年間の系統的な単元計画の策定に取り組んできた。今後も異校種の取組を滑らかに接続させ、持続可能なプログラムにしていくために、各学校及び教育研究所各部会等の主体的な取組を適切に支援していく町教育委員会の効果的な関わり方、これまでの取組が生徒や地域・保護者にとって本当に効果的なものになっているか、指導する教員にとって無理のないものになっているか等の検証を行い、取組の内容を精選していく。